

暮 坪 遺 跡

— (仮称) 西吾妻福祉病院造成工事に伴う発掘調査報告書 —

2001

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

暮 坪 遺 跡

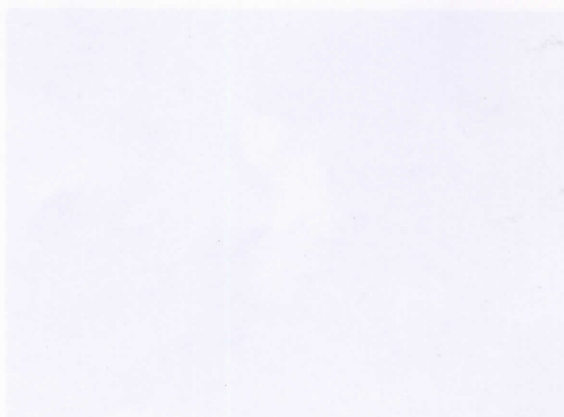
— (仮称) 西吾妻福祉病院造成工事に伴う発掘調査報告書 —

2001

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会



遺跡遠景（背景に白根山を望む）

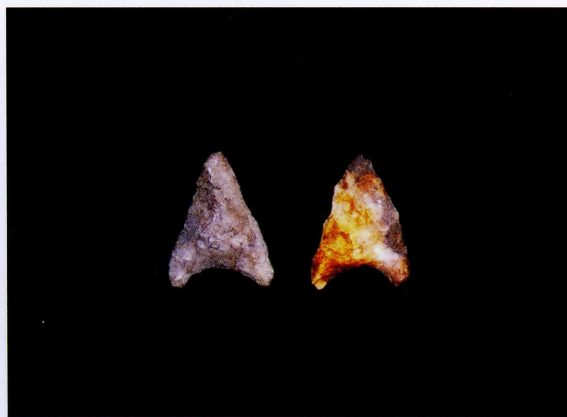




SI01 出土土器



块状耳飾 (SK02)



珪質凝灰岩製石鏃

序

現在、長野原町は八ツ場（やんば）ダム建設という大事業に全町を挙げて取り組んでおります。その中で、貴重な文化遺産を後世に正しく伝えるべく調査し、保存・活用を行えるよう考えております。

本町では、群馬県教育委員会文化財保護課の指導のもと、全町を対象にした遺跡詳細分布調査を三ヵ年かけて実施しました。その結果、先人がのこした数多くの遺跡が存在することが確認されています。

今回の暮坪遺跡の調査は、(仮称)西吾妻福祉病院用地の造成に伴う調査であります。

この調査により県下でも稀少な縄文時代前期前葉の住居跡・土壌墓が検出され、当時の生活を偲ばせる土器・石器が出土しました。本書はこれらの調査成果を収録したものであります。

末筆になりますがこの調査を実施するにあたり、関係各位に対し厚く御礼申し上げますとともに、本書が広く活用され文化財の保護に役立つことを願い序文といたします。

平成13年3月

長野原町教育委員会

教育長 金子 宥 卷

例 言

1. 本書は、群馬県吾妻郡長野原町大字羽根尾字暮坪に所在する暮坪遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は（仮称）西吾妻福祉病院造成工事に伴う事前調査として、長野原町の委託を受けた長野原町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査から調査報告書作成に至るまでの調査事業費は、長野原町的全額負担による。
4. 調査は発掘調査を平成12年5月15日から6月8日迄、整理調査及び報告書作成を平成12年6月9日から平成13年3月28日迄の期間実施した。
5. 本遺跡の出土遺物ならびに図面・写真は全て長野原町教育委員会が保管している。
6. 本書は富田孝彦が編集した。執筆は第IV章以外は富田が行った。
7. 調査において以下の項目の一部を委託した。

表土掘削：長野原町建友会特定建設工事共同企業体

測量・航空写真：(株)測研

炭化材・種子同定分析：(株)パレオ・ラボ

8. 本書における石器の石質鑑定は飯島静夫氏（群馬地質研究会）に依頼した。また剥片石器類の実測において麻生敏隆氏（(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団）の手を煩わせた。
9. 発掘調査、整理調査及び報告書作成にあたり、次の方々、団体から御指導・御協力を賜った。（五十音順敬称略）

麻生敏隆・飯島静男・飯島義雄・池田政志・石田 真・市村勝美・大西雅広・小野和之・小川卓也・久保 学・黒岩文夫・小林克次・坂寄富士夫・桜井光照・関 俊明・高橋政充・田中 雄・田村公夫・谷藤保彦・堤 隆・野口 淳・野口茂男・長谷川福司・藤巻幸雄・藤森英二・松原孝志・望月明彦・山口逸弘・渡辺弘幸・群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・西吾妻福祉病院組合

10. 調査組織は次のとおりである。

教 育 長 金子宥巻

課 長 浅見俊雄

補 佐 林 敏則・樋口 正

係 長 白石光男・浅井一弘

調査担当者 富田孝彦

調査参加者

浅見 弘・唐沢美恵子・黒岩峰吉・小林大吉・嶋村和作・萩原 仁・山口正太郎・渡辺重雄

凡 例

1. 本書で使用した地図は1：5,000「吾妻川流域平面図7」（建設省関東地方建設局八ツ場ダム工事事務所1986）、1：25,000地形図「長野原」・「大前」（国土地理院1997）である。
2. 挿図の方位は磁北を示す。
3. 挿図の縮尺については下記の通りであり、各挿図中に示してある。

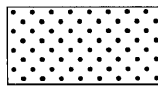
遺 構 住 居 跡……………	1/60	畝状遺構……………	1/60
炉・土坑……………	1/30		
遺 物 復元土器……………	1/4		
土器片・礫石器……………	1/3		
石製品・剥片石器類……………	1/2（石鏃は1/1）		
4. 遺構の略号については以下の通りである。

SI：住居跡 SK：土坑（土墳墓）
5. 挿図に図示した遺物は、観察表にその内容を記してある。観察表における復元土器の法量は左側から器高、中央が口径、右側が底径を表し、（ ）内の数値は現存値、〈 〉内の数値は復元値を表す。
6. 土器の色調に関しては、「新版標準土色帖1995年後期版」（編・著小山正忠・竹原秀雄、監修農林水産省農林水産技術会議事務局、色票監修財団法人日本色彩研究所）の色名を参考にした。観察表において外面／内面の順で記した。
7. 遺構・遺物実測図中のスクリーン・記号は下記の通りである。

遺構

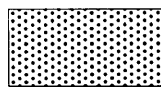


地山



炉・焼土範囲

遺物



繊維



磨面範囲



敲打範囲

土器 ● 石器（自然礫含む） ▲

目 次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

第 I 章 調査概要

1. 調査に至る経緯…………… 1
2. 調査の方法と経過…………… 1

第 II 章 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置…………… 5
2. 周辺の遺跡…………… 5
3. 基本層序…………… 8

第 III 章 検出された遺構と遺物

1. 埋 没 谷……………11
2. 竪穴式住居跡……………11
3. 土坑（土壙墓）……………18
4. 畝状遺構……………19
5. 遺構外出土遺物……………19

第 IV 章 自然科学分析

1. 暮坪遺跡出土の炭化材の樹種同定……………24
2. 暮坪遺跡から出土した炭化種実……………26
3. 暮坪遺跡出土の黒耀石製石器の原産地推定……………27

第 V 章 ま と め……………32

遺物観察表

写真図版

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000) ……………	6	第12図	SK01・02および出土遺物実測図、 畝状遺構実測図……………	20
第2図	基本土層……………	8	第13図	遺構外出土遺物実測図1……………	21
第3図	調査地点位置図 (S = 1/5,000) ……………	9	第14図	遺構外出土遺物実測図2……………	22
第4図	調査区全体図 (S = 1/400) ……………	10	第15図	関東・中部地方の黒耀石原石採取地点 (小林1999) ……	28
第5図	SI01実測図……………	12	第16図	関東・中部地方の黒耀石原産地判別図1……………	29
第6図	SI01遺物出土状況図……………	13	第17図	関東・中部地方の黒耀石原産地判別図2……………	29
第7図	SI01出土遺物実測図1……………	14	第18図	暮坪遺跡出土黒耀石の原産地判別図1……………	30
第8図	SI01出土遺物実測図2……………	15	第19図	暮坪遺跡出土黒耀石の原産地判別図2……………	30
第9図	SI02実測図……………	16	第20図	暮坪遺跡出土黒耀石の原産地判別結果……………	31
第10図	SI02遺物出土状況図……………	17			
第11図	SI02出土遺物実測図……………	18			

挿 表 目 次

第1表	調査経過……………	4	第4表	関東・中部地方の黒耀石原産地一覧……………	28
第2表	周辺の遺跡……………	7	第5表	暮坪遺跡出土黒耀石製石器の原産地推定結果……………	31
第3表	暮坪遺跡出土木材の樹種同定結果……………	24			

図 版 目 次

PL. 1	遺跡全景 遺跡近景① 遺跡近景② 埋没谷 畝状遺構	PL. 5	遺構外出土遺物②
PL. 2	SI01 SI01遺物出土状況 SI02 SI02遺物出土状況 SI02炉 SK01 SK02 SK02半截状況	PL. 6	遺構外出土遺物③
PL. 3	SI01出土遺物	PL. 7	暮坪遺跡出土炭化材の樹種①
PL. 4	SI02出土遺物 SK02出土遺物 遺構外出土遺物①	PL. 8	暮坪遺跡出土炭化材の樹種②
		PL. 9	暮坪遺跡出土炭化材の樹種③ 出土した炭化種実

第 I 章 調査概要

1. 調査に至る経緯

長野原町を含む西吾妻地域は、従前より病院の設置を熱望し、関係機関への陳情も行っていった。その折、群馬大学付属病院草津分院移転構想が策定され、且つ、平成13年度で草津町に所在する群馬大学付属病院草津分院の撤退も正式決定された。長野原町・嬭恋村・草津町・六合村の4ヵ町村では、協議の末、一部事務組合を設立し、西吾妻福祉病院を建設することとなった。

平成11年5月下旬に長野原町から教育委員会に埋蔵文化財の有無の照会があった。病院本体は大津と羽根尾の区界の尾根をカットして建設するが、植栽予定地および遊歩道はその南側の斜面地を削平する計画となっていた。当該地は町内詳細分布調査の暮坪遺跡(No.117)に一部が該当し、中世山城である羽根尾城が隣接していることも考慮して造成工事着手以前に試掘調査を実施する必要があるとの回答をした。その後、計画地の現状と対応策を検討した結果、試掘調査を行う旨で合意した。8月4日に試掘調査の依頼文書が長野原町から提出され、耕作地の調整・重機搬入に伴う協議を経て、平成11年9月14日～同月30日(うち9日間)および平成12年1月17日の2度にわたって教育委員会文化財担当立合いで実施された。当初の調査対象面積は14,269㎡であったが未調整部分を除き、最終的に合計で約12,700㎡となった。

調査地点は傾斜地であったが幅1.5m程のトレンチを合計17本設定し行った。その結果は①試掘調査区域の西側半分は現表土より地盤の傾斜がかなり強く、遺構・遺物は皆無に等しかった。②調査区東側の羽根尾城に隣接した区域は西側に比べて、比較的安定した平坦面が確認され、竪穴式住居跡・土坑が検出された。③出土した遺物は縄文時代前期前葉(二ツ木式・関山式)土器・近世陶磁器にほぼ限定される、の3点に要約でき、上記平坦面の記録保存を前提とした発掘調査が必要であることが確定した。

1月17日には試掘調査結果を原因者に回答し、発掘調査費用の策定・調査区内の山林伐採を経て、平成12年5月15日から本調査を開始する運びとなった。

2. 調査の方法と経過

(1) 発掘調査

a. 表土除去

表土除去は重機(バックホー)を使用して行った。試掘調査で遺構の掘り込み面が黒色土中であること、遺構密度が疎らであることが判明していたので、そのことを念頭に表土から遺構確認面まで少しずつ掘り下げていった。遺物が散見される面までを重機でそれ以下は人力で除去したが、遺構面が検出されない場合は地盤である関東ローム層まで下げて確認した。また、重機のバケットの爪に鉄板を溶接して遺構を傷つけないように配慮した。

b. 遺構確認

遺構確認は上述の表土除去後に人力で行った。住居跡は確認面での覆土の識別に努め、平面形を確定していった。その他調査区内には伐根跡が多数確認され、それらと土坑との識別に努めた。ほぼ単一時期の遺構であったので比較的容易に作業は進んだ。

c. 基準杭の設定

調査区全体を網羅するように国家座標IV系に準拠した5×5mの基準杭(グリッド)を設定し、測量作業の基準とした。また、調査区内に標高値を落とし込んだ任意の杭を設定し、土層堆積状況断面図や遺物出土状況図作成の際の基準とした。

d. 遺構発掘及び遺物の取り上げ

遺構の発掘作業は、遺構の平面形を確定した上で土層観察用のベルトを設定し、遺構内の覆土の除去に着手した。住居跡の場合は長軸方向とその中心から長軸に対して直交方向に十字にベルト設定し、土坑の場合は長軸に沿って半截して土層の観察を行った。

遺物の取り上げについては、単独と思われる破片は上層・下層・床面直上ごとに、個体もしくは遺物の集中している箇所に関しては出土位置図(ドット図)を作成の上、取り上げ作業を行った。遺物出土位置図は1/10のスケールで作成し、標高値の記録を一点ずつ行った。

e. 実測図の作成及び遺構の写真撮影

実測図は土層堆積状況図、遺物出土位置図及び完掘状況遺構平面図を作成した。土層堆積状況図は遺構が小規模であったので遺物出土位置図と同様に1/10のスケールで作成した。完掘状況遺構平面図は光波測距儀を用いて行った。完掘遺構の変化点を三次元記録し、その場でパーソナル・コンピューターにより現地での詳細な観察の上で結線し作成した。また、土層堆積状況図及び遺物出土状況(位置)図のポイントの位置も完掘状況遺構平面図作成時に記録した。測定したデータは公共座標値に変換後、加工・編集を行いフロッピーディスクに保管した。

遺構の記録写真は土層断面、遺物出土状況、完掘状況の順で撮影を行った。カメラは一眼レフを用い、モノクロとカラースライドの2種類のフィルムを使用した。フィルムサイズは35mmである。

f. 航空写真撮影

発掘調査終了後に遺跡全体の航空写真の撮影を行った。航空写真はヘリコプターを用いて行い、調査地点の遠景、近景のほか、白根山を背景とした俯瞰撮影も実施した。

(2) 自然科学分析

遺跡の性格や内容をより具現化するために発掘調査の成果に基づき自然科学的手法を用いて以下の2項目を実施した。

a. 炭化材・炭化種子の同定分析

暮坪遺跡の遺構覆土には炭化材が多く認められた。特にSI01では住居中央の覆土中から焼土とともに良好な炭化材・炭化種子が検出された。また、土壌墓と考えられるSK02では半截した覆土をすべて層位ごとにサンプリングし、洗浄すると数種類の炭化材が検出された。このように遺構から検出された炭化材や炭化種子は当時の周辺環境の復原や建築部材の特定などの基礎資料となる。

b. 黒耀石の原産地推定

暮坪遺跡からは20点余りの黒耀石の剥片が出土している。これまでのデータの蓄積により、関東・中部地方の黒耀石原産地がほぼ判明しており、当時の流通の在り方やそのしくみを知る上で重要な研究テーマの一つである。本遺跡出土の黒耀石がどの原産地に由来するのかを非破壊の蛍光X線分析法を用いて行った。

(3) 調査経過

a. 発掘調査

発掘調査は平成10年5月15日から6月8日(約3週間)にわたって行われた。

5月15日、調査範囲確認、仮設駐車場・トイレの設置、テントの設営、機材の搬入を行う。

5月16日～22日、重機による表土除去。これと併行して表土除去部を順次ジョレンがけ、遺構確認作業を行う。住居跡2軒・土坑・谷を検出する。

5月23日、SI02はベルトを残して掘り下げ・床面精査。土層堆積状況(以下セクション)写真・図面完了。土坑は半截してほとんどが抜根跡と判明する。

5月24日、SI01はベルトを残して掘り下げ。SI02はベルトを外してピット完掘・炉半截。

5月25日、SI01は床面精査。SI02は炉セクション図・写真完了。谷部掘り下げ。

5月26日、谷部掘り下げ開始。

5月29日、SI01はセクション図・写真完了。

5月30日、SI01はベルト外し・ピット掘り下げ。

5月31日、雨天のため中止。

6月1日、SI01は遺物出土状況写真。SI02は遺物出土位置図・取り上げ・完掘写真。土坑は完掘。SK02で珧状耳飾り出土・セクション図・写真。

6月2日、SI01は遺物出土位置図・取り上げ。SK02は完掘・写真。畝は掘り下げ開始。

6月5日、SI01は完掘写真。谷部は完掘・写真清掃。畝は完掘。完掘状況遺構平面図の作成開始。

6月6日、谷部・畝は完掘写真。完掘状況遺構平面図の完了。全体清掃開始。

6月7日、午前中で全体清掃完了。午後に撤収。

6月8日、航空写真。

b. 整理調査・報告書作成

引き続き6月11日から整理調査・報告書作成を行うこととなった。発掘調査によって得られた遺物はテンバコで2箱、現場で作成した図面類は10枚程度であった。その他の立合・試掘調査や社会教育課の事業の合間を見て担当と作業員1名で作業を進めていくことになった。

遺物洗浄・注記作業は6月11日～6月29日までの約3週間で費やした。これと併行して遺構図面の修正、遺構写真の整理を行った。

遺物の接合作業及び石膏による復元作業は7月2日～7月31日までの約1ヵ月間を費やし、報告書に掲載する遺物をほぼ確定した。

8月1日～9月28日までは事業の合間をみて土器・礫石器の実測・拓本・トレースを行った。これと併せて遺構図のトレースを行い、剝片石器に関しては麻生敏隆氏に実測していただいた。また、遺構出土の炭化材・炭化種子の種子同定を委託して行った。

版下作成のため作業員を一人増やし、10月1日～11月30日までの2ヵ月間を費やした。

遺物写真は11月中旬～下旬に完了した。また、石質鑑定を飯島静男氏に、黒耀石の原産地推定を小林克次氏に依頼して行った。

編集作業は12月上旬までに仮割付を行い、執筆作業は12月～1月中旬にかけて行った。併せて保管用に資料・遺物の整理をして3月28日、全ての作業を完結した。

第1表 調査経過

		5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
発掘調査		—										
遺物	接合		—									
	復元			—								
	実測・拓本				—	—						
	トレース				—	—						
	版下作成						—	—				
	写真撮影						—					
	写真図版作成							—	—			
遺構	原図整理		—									
	トレース				—	—						
	版下作成						—	—				
	写真図版作成							—	—			
原稿	遺物観察表							—				
	本文								—	—		
分析委託						—			—			
編集・資料整理										—	—	

第II章 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

暮坪遺跡が所在する長野原町は群馬県の北西部、吾妻郡の南西隅に位置し、「鶴舞う形の群馬県」と上毛かるたに読まれている鶴の尾部下端にあたる。北部は高間山(標高1,341m)・本白根山(標高2,171m)の両山系からなり吾妻川流域沿いに東西に延びている。南部は浅間山(標高2,568m)の裾野に広がる浅間高原地帯を経て長野県に接している。暮坪遺跡は北部の吾妻川流域地帯に属し、吾妻川左岸の丘陵上に立地する。

本遺跡の立地する吾妻川左岸は草津白根火山の南麓にあたる。草津白根火山は最高峰の本白根山を中心として白根山・米無山からなり、東側および南側に広大な裾野を形成している。裾野の先端は吾妻川によって深く削られ、吾妻川流域地帯には所々に河岸段丘が発達している。本遺跡は草津白根火山から南東に延びる丘陵の末端付近の南斜面に位置し、現在の市街地とは約100mの比高差を有している。この丘陵は第三紀層や古い火山噴出物、約11,000年前に噴出したと考えられる浅間草津黄色軽石層が基盤を成し、その上を関東ローム層が覆っている。調査地点の標高は約770～776mである。

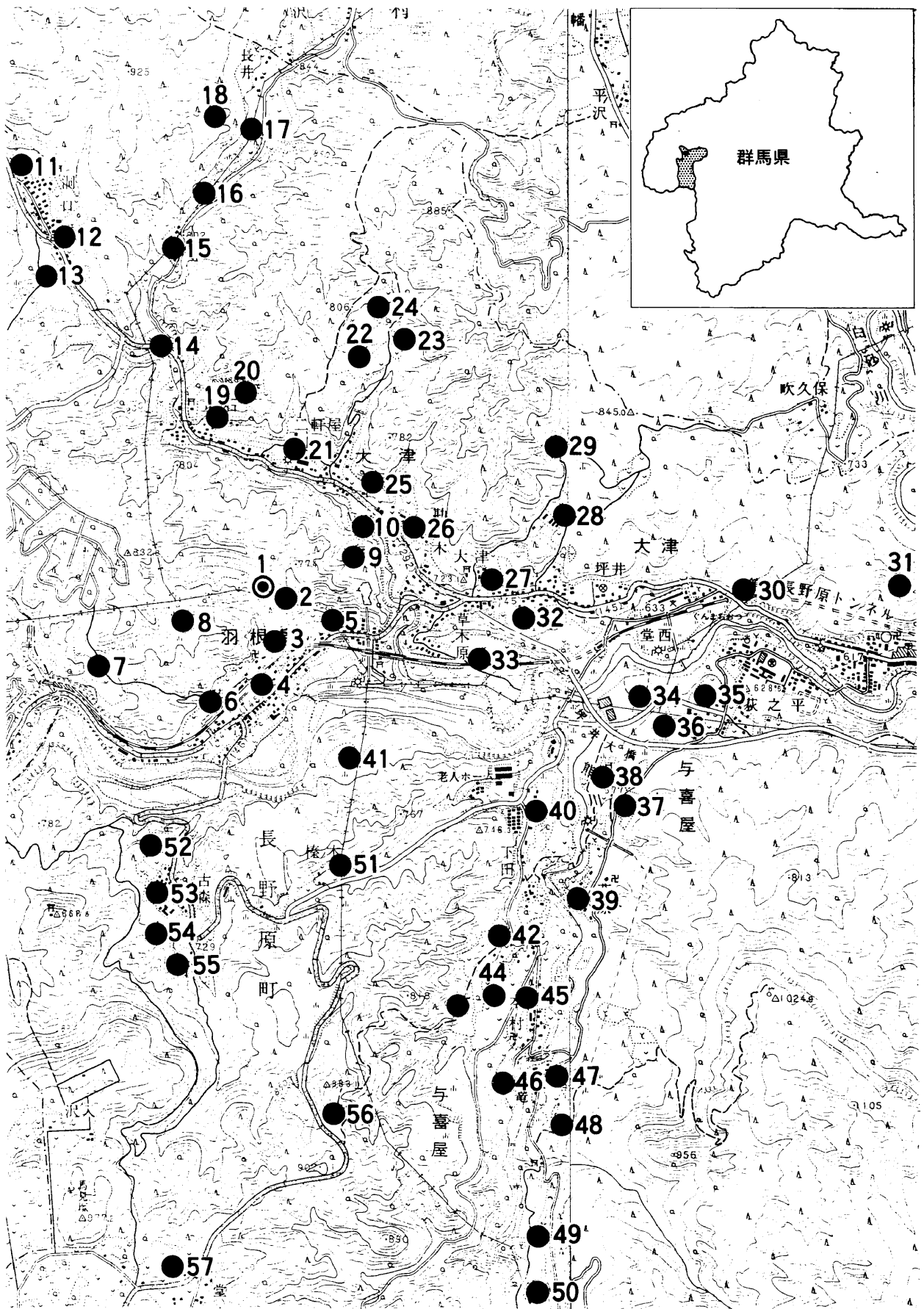
2. 周辺の遺跡

長野原町における遺跡分布状況は昭和48年に群馬県教育委員会刊行の『群馬県遺跡地図』に依っていたが詳細な遺跡の分布の把握は不十分であった。その後、町教育委員会は県教育委員会文化財保護課の指導のもと、昭和62年度から三ヵ年かけて、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を実施し、199の遺跡包蔵地を確認した⁽¹⁾。また平成6年度から八ツ場ダム建設事業に関連した工事用進入路や水没地域の工事に対応して(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査を継続して行っており、包蔵地も着々と増加している。平成12年度12月現在で210の包蔵地(指定史跡等を含む)が把握されている。

本遺跡の位置する吾妻川流域地帯の西部地区はダム関連事業とは直接関連する地域ではないが、周辺には多くの遺跡が分布している(第1図・第2表)。これを見ると遺跡は基本的に吾妻川とその支流沿いの河岸段丘上に占地していることが分かる。分布調査や発掘調査により、周辺の57遺跡中、37遺跡が縄文時代に属することが判明している。ここでは流域沿いに主に縄文時代遺跡を概観したい。

吾妻川沿岸の縄文時代遺跡は本遺跡(1)、馬場平遺跡(7)、坪井遺跡(32)、草木原遺跡(33)、長畝I遺跡(35)、長畝II遺跡(36)、外輪原II遺跡(41)である。坪井遺跡は縄文中期の集落が主体であるが前期初頭花積下層式期の住居跡1軒、土坑6基が検出されている。長畝II遺跡では前期前半関山式～黒浜式期の住居跡2軒、中期後半の住居跡2軒の他、土坑が検出されている⁽²⁾。

吾妻川の支流で白根山に端を発し、北西から南東に向かって流下する遅沢川沿岸は鹿生遺跡(9)、観奈遺跡(11)、向井遺跡(13)、桑井遺跡(14)、クヌギI遺跡(19)、クヌギII遺跡(20)、立石遺跡(21)、熊野遺跡(25)、勘場木遺跡(26)が該当し、さらに遅沢川に流れ込む長井沢沿いには長井I遺跡(15)、赤羽根沢沿いに赤羽根遺跡(23)、大久保I遺跡(24)がある。クヌギII遺跡は中期中葉～後期の住居跡4軒の他、中期中葉の埋設土器が検出されている。遺構外では前期土器片も認められる⁽³⁾。勘場木遺跡は中期後半の住居跡1軒が検出されており、県史跡に指定されている。遺構外では前期土器(片)も認め



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

第2表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代	概要	備考
1	暮坪遺跡	集落跡	縄文・近世	縄文中期土器・磨製石斧・凹石出土。今回の調査で縄文時代前期前葉ニツ木式期の住居跡2軒・土坑2基などを検出。	本報告 山口正太郎氏蔵 文献1
2	羽根尾城跡	城館跡	中世	吾妻川左岸で城峯山の山頂に立地。梯郭式の山城で土塁・堀切が残る。羽根尾(海野)氏の拠城。	町史跡 文献1, 2, 3, 4
3	羽根尾I遺跡	散布地	平安		文献1
4	羽根尾II遺跡	散布地	奈良		文献1
5	宮原遺跡	散布地	平安		文献1
6	小滝遺跡	散布地	平安		文献1
7	馬場平遺跡	散布地	縄文・平安	打製石斧・磨石出土。	桜井勝三郎氏蔵 文献1
8	宮の上遺跡	散布地	平安		文献1
9	鹿生遺跡	散布地	縄文	中期。石器片出土。	文献1
10	弁天遺跡	散布地	平安		文献1
11	観奈遺跡	散布地	縄文?・平安	凹石出土。	文献1
12	洞口遺跡	散布地	平安		文献1
13	向井遺跡	散布地	縄文・平安	石片出土。	文献1
14	桑井遺跡	散布地	縄文・平安	縄文中期。	文献1
15	長井I遺跡	散布地	縄文・平安	縄文早期～中期の遺物を確認。磨石・スクレイパー出土。	金井長太郎氏町に寄贈 文献1, 2
16	長井II遺跡	散布地	平安	遺跡内に五輪塔あり。	文献1
17	長井岩跡	城館跡	中世	遅沢川の支流、長井沢の右岸に面する尾根上に立地。	文献1, 4
18	長井岩陰群	岩陰		岩陰2ヵ所にわたる。	文献1
19	クヌギI遺跡	散布地	縄文・平安		文献1
20	クヌギII遺跡	集落跡	縄文	昭和63年、町教委調査。中期中葉～後期。住居跡4軒(うち敷石住居3軒)、中期中葉の埋設土器など出土。	浅見喜義氏蔵(表採資料) 文献1, 5
21	立石遺跡	散布地	縄文・平安	縄文中・後期。磨製石斧・石鏃・石匙・石錘出土。	文献1, 2, 3, 7
22	赤羽根遺跡	散布地	縄文・平安	縄文中期。石匙出土。	市村安雄氏蔵 文献1, 2
23	大久保I遺跡	散布地	縄文	中期。	文献1
24	大久保II遺跡	散布地			文献1
25	熊野遺跡	散布地	縄文	中期。	金丸寿子氏蔵 文献1
26	勘場木遺跡	集落跡	縄文	昭和29年調査。中期後半の住居跡1軒、前期～後期の土器片など検出。	県史跡 塩野新一氏蔵 文献1, 2, 7, 8, 9
27	高平遺跡	散布地	縄文・平安		文献1
28	寺久保遺跡	散布地	縄文・弥生・平安	縄文中期。黒耀石片・弥生後期土器片出土。	文献1
29	寺沢遺跡	散布地	縄文	中期。	文献1
30	遠西岩陰群	岩陰		岩陰2ヵ所にわたる。	文献1
31	長野原城跡	城館跡	中世	吾妻川左岸で町の市街地北側の尾根上に立地。土塁・堀切・物見台などが残る。長野原合戦の舞台。	文献1, 2, 3, 4
32	坪井遺跡	集落跡? 古墳?	縄文・弥生・古墳?・平安・中近世	平成3年、町教委調査。陥穴・土坑、中期後半の土器片などを検出。さらに平成10年、町教委第2次調査。縄文前期初頭の住居跡1軒・土坑6基、中期後半の住居跡19軒・土坑48基、後期の土坑1基、弥生中期の土坑1基、平安の住居跡1軒・掘立柱建物跡1棟、中近世の配石・集石遺構などを検出。遺跡内に「上毛古墳総覧」記載の「鉄塚」あり。	文献1, 2, 7, 10, 11, 12
33	草木原遺跡	散布地	縄文・平安	縄文中期。磨製石斧出土。	文献1, 2
34	旧新井村跡	埋没村落	近世	昭和55年調査。天明3年の浅間災害による泥流で埋没した村落。屋敷跡や用水池、農機具・石臼などを検出。	文献1, 2, 6
35	長畝I遺跡	散布地	縄文	中期。	文献1
36	長畝II遺跡	集落跡	縄文	平成2年、町教委調査。前期の住居跡2軒・中期後半の住居跡2軒のほか土坑を検出。	文献1, 10
37	長畝III遺跡	散布地	平安		文献1
38	萩原I遺跡	散布地	平安		文献1, 2
39	萩原II遺跡	散布地	縄文・平安	縄文中期。	文献1
40	外輪原I遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳?・平安	縄文前期～後期。石鏃・石斧・土器片出土。弥生中期土器。遺跡内に「上毛古墳総覧」記載の「五輪塚」があったが現在はほぼ消失。	桜井光昭氏町に寄贈 文献1, 2, 12, 13, 14
41	外輪原II遺跡	散布地	縄文	磨石・敷石出土。	文献1, 2
42	北沢I遺跡	散布地	縄文・平安	縄文中・後期。	文献1
43	北沢II遺跡	散布地	縄文・平安	縄文中・後期。黒耀石片、内黒土器出土。	文献1
44	上ノ平遺跡	散布地	縄文・弥生・平安	縄文前期～後期。石斧・石皿・石鏃・石錘・人面把手土器片出土。弥生中期土器・太形蛤刃石斧出土。	篠原伝氏蔵、桜井光昭氏町に寄贈 文献1, 2, 7
45	与喜屋I遺跡	散布地	縄文	石斧出土。	篠原功氏蔵 文献1, 2
46	与喜屋II遺跡	散布地	縄文	中期。土器片出土。	文献1, 2, 7
47	虹籠I遺跡	散布地	平安		文献1
48	虹籠II遺跡	散布地	縄文・平安	縄文後期。	文献1
49	山岸I遺跡	散布地	縄文?・平安	チャート片出土。	文献1
50	山岸II遺跡	散布地	平安		文献1
51	榛木沢遺跡	散布地	縄文	前期。	文献1
52	上古森遺跡	散布地	縄文・平安	チャート片・磁器出土。	文献1
53	諏訪原遺跡	散布地	縄文	石皿・チャート片出土。	文献1
54	中嶋遺跡	散布地	縄文	黒耀石片出土。	文献1
55	田之平遺跡	散布地	縄文	中期。	文献1
56	所舟遺跡	散布地			文献1
57	堂光原遺跡	散布地	縄文	黒耀石片出土。	文献1

られる⁽⁴⁾。

吾妻川のもう一つの支流で浅間高原地帯から北流する熊川沿岸および熊川に流れ込む沢にも多くの遺跡が確認されている。そのうち縄文時代に該当するのは萩原II遺跡(39)、外輪原I遺跡(40)、北沢I遺跡(42)、北沢II遺跡(43)、上ノ平遺跡(44)、与喜屋I遺跡(45)、与喜屋II遺跡(46)、蛇籠II遺跡(48)、山岸I遺跡(49)、榛木沢遺跡(51)である。外輪原I遺跡では試掘調査の資料で前期土器(片)が出土している⁽⁵⁾。

この他に吾妻川に注ぎ込む小さな沢沿いにも遺跡の分布が認められる。左岸では寺沢沿いに寺久保遺跡(28)、寺沢遺跡(29)、右岸では洞の沢沿いには上古森遺跡(52)、諏訪原遺跡(53)、中嶋遺跡(54)、田之平遺跡(55)が縄文時代遺跡として把握されている。

3. 基本層序

本遺跡の基本層序は第4図のA地点で確認した。試掘調査での所見と併せると以下ようになる。

第I層 暗灰褐色土

いわゆる表土で、上位は畑の耕作土である。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。

第II層 黒褐色土

いわゆる黒ボク層で、ほとんど混入物は認められない。締まりは強い。

第III層 暗褐色土

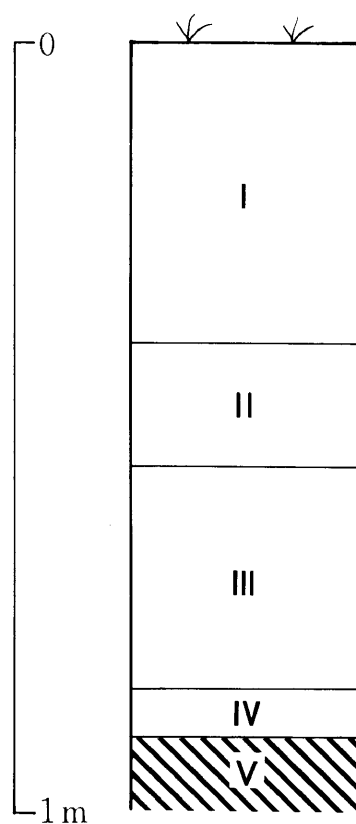
黄褐色軽石を多く含んでおり、縄文時代前期前葉の遺構はこの層中を掘り込んで構築されている。締まりは強い。調査区北側に向かってその厚さを増している。

第IV層 暗黄褐色土

いわゆる漸移層で、締まりは強い。

第V層 黄褐色土

いわゆる関東ローム層でスコリアを少量含んでいる。粘性・締まりともに強い。



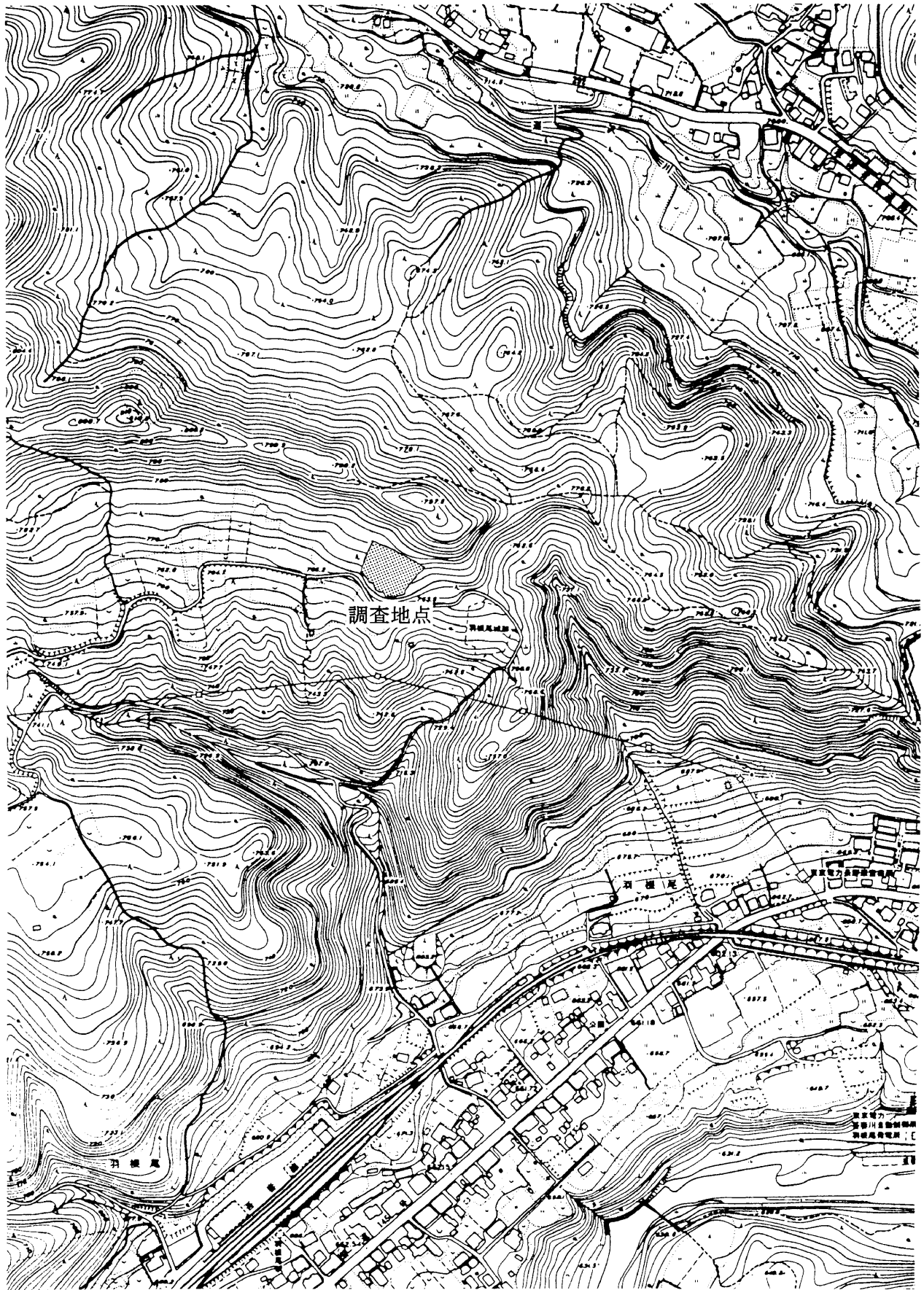
第2図 基本土層

註

1. 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査—』
2. 白石光男 1992『長畝II遺跡 坪井遺跡』長野原町教育委員会
3. 巾 隆之他 1990『クヌギII遺跡』長野原町教育委員会
4. 白石光男・山口逸弘 1999「外輪原I遺跡の縄文前期土器」『群馬考古学手帳』9
5. 塩野新一 1972『群馬県吾妻郡長野原町(群馬県史跡指定) 勘場木遺跡』
桜岡正信 1988「勘場木遺跡」『群馬県史』資料編1 群馬県

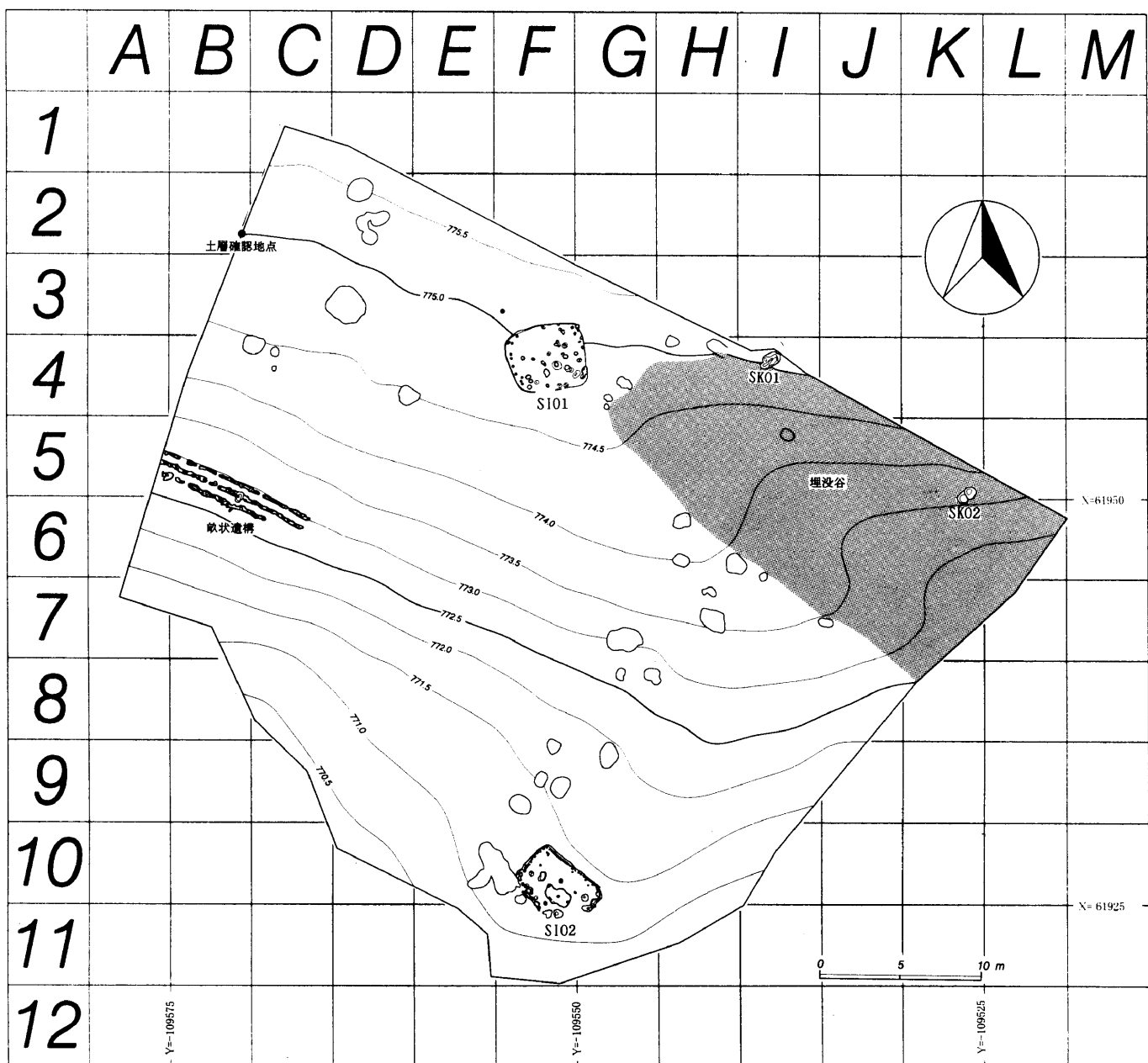
参考文献(第2表の文献に対応)

1. 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査—』



第3図 調査地点位置図 (S = 1/5,000)

2. 長野原町 1976『長野原町誌』上巻
3. 山崎 一 1978『群馬県古城墓址の研究』下巻
4. 群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』
5. 巾 隆之他 1990『クヌギII遺跡』長野原町教育委員会
6. 群馬県立歴史博物館 1995『第52回特別展 天明の浅間焼け』
7. 群馬県教育委員会 1973『群馬県遺跡地図』
8. 群馬県史編纂委員会 1988『群馬県史』資料編1 群馬県
9. 塩野新一 1972『群馬県吾妻郡長野原町（群馬県史跡指定）勘場木遺跡』
10. 白石光男 1992『長畝II遺跡 坪井遺跡』長野原町教育委員会
11. 富田孝彦 2000『坪井遺跡II』長野原町教育委員会
12. 群馬県教育委員会 1938『上毛古墳総覧』
13. 白石光男・山口逸弘 1999『外輪原I遺跡の縄文前期土器』『群馬考古学手帳』9
14. 富田孝彦 2000『外輪原I遺跡の弥生中期土器』『群馬考古学手帳』10



第4図 調査区全体図 (S = 1/400)

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

1. 埋没谷 (第4図/PL. 1)

位置 調査区東側、G～M-4～8グリッド。

重複 SK01・02と重複し、SK01に切られ、SK02との切り合いは不明である。

遺存状態 良好。

覆土 単一層。基本土層第Ⅲ層の暗褐色土。

形状・規模 谷頭部分の検出で南東方向の調査区外に延びている。検出総長は約26m、幅は12m以上、検出部分の最深は約40cmを測る。断面は緩やかな幅広のU字形を呈する。

遺物 土器片3点と石器1点が出土。そのうち石器を遺構外出土遺物で掲載した(第14図38)。

備考 調査当初は、隣接する羽根尾城関連の遺構の可能性も考えたが、覆土やSK01との切り合い等から自然の谷地形であると判断した。

2. 竪穴式住居跡

SI01 (第5～8図/PL. 2・3)

位置 調査区北側、F・G-3・4グリッド。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 平面形は東西方向に長軸を採る隅丸長方形を呈す。規模は長軸4.75～4.88m、短軸4.14m、床面積17.0㎡を測る。

主軸方位 N-13°-W

床面 床面は直床式で軟弱である。中央付近で若干の硬化面が検出された。北側から南側へ向かって傾斜している。

壁・壁溝 壁高は北壁・西壁で約10cmを測り、外傾して立ち上がっている。壁溝は認められなかった。

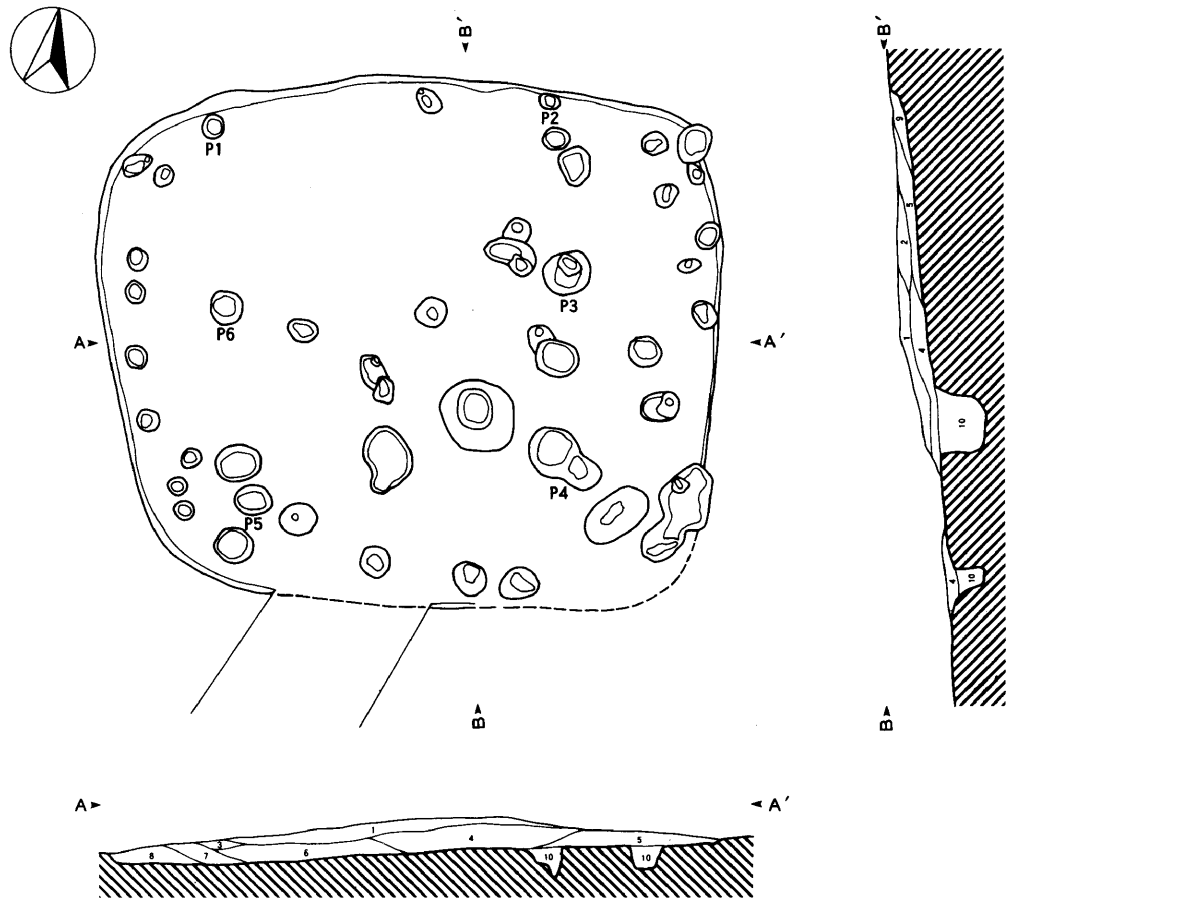
柱穴 支柱穴は不明瞭であるがP1～P6の6本柱を想定した。この他に東壁・西壁に沿って柱穴列が検出されている。柱穴列は径15～20cm程、床面からの深さが13～22cm程である。

炉跡 本住居跡から炉跡と考えられる施設は検出されなかった。

その他の施設 なし。

遺物検出状況 遺物は住居中央に集中しており、復元土器(第7図1)、敲石(第8図10)が床面直上で出土している。また住居中央の上層で長軸2.8m×短軸1.5mの範囲で焼土層がレンズ状に堆積しているのが確認されており、その層中から炭化材・炭化種子が検出されている。分析の結果、炭化材はクリ・ケヤキ、炭化種子はクリであることが判明している(第Ⅳ章-1・2)。

遺物 総出土量は土器片41点、石器(礫・剝片含む)73点である。そのうちの土器5点、石器4点を図示し得た。土器は復元土器1点以外はすべて土器片である。1は復元高42.3cm、復元口径34.0cm、復元底径12.3cmを測る。4単位の波状口縁で、内弯して膨らむ胴部に屈曲を設けて外反しながら直立して立



SI01土層説明
AA' BB'

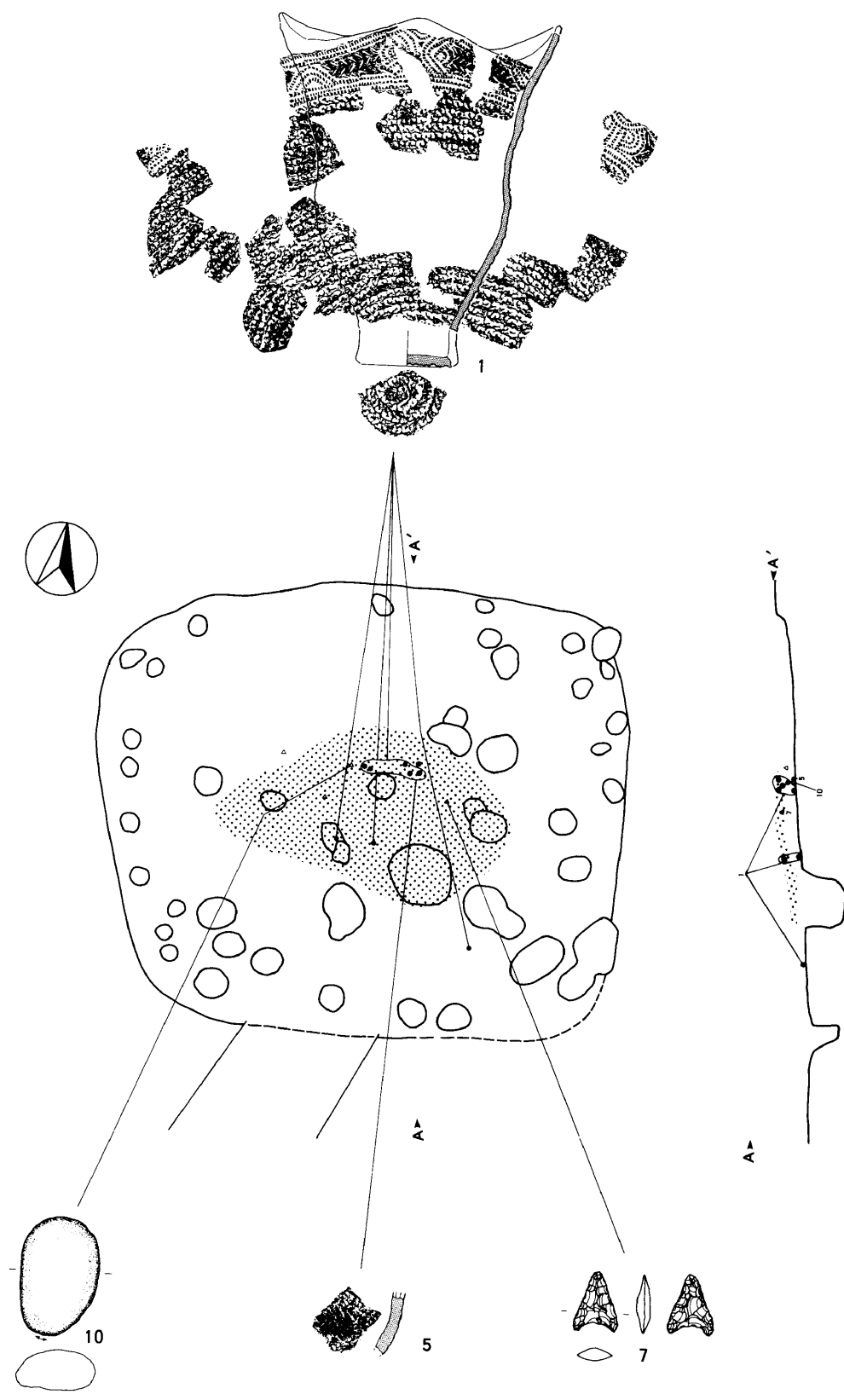
1. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒を微量、 $\phi \sim 1$ cm大の軽石・焼土粒・炭化粒を含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒を微量、 $\phi \sim 1$ cm大の軽石を含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・ $\phi \sim 1$ cm大の軽石を少量含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・ $\phi \sim 1$ cm大の軽石を含む。
5. 明褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム粒を多量、 $\phi \sim 3$ cm大の軽石を少量含む。
6. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒を多量、 $\phi \sim 1$ cm大の軽石を含む。
7. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒を少量含む。
8. 明褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒を多量、 $\phi \sim 1$ cm大の軽石を含む。
9. 明褐色土層：粘性、締まり共になし。ローム粒を多量、 $\phi \sim 1$ cm大の軽石を含む。
10. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・ $\phi \sim 1$ cm大のロームブロックを含む。

0 PL=775.2m 1m

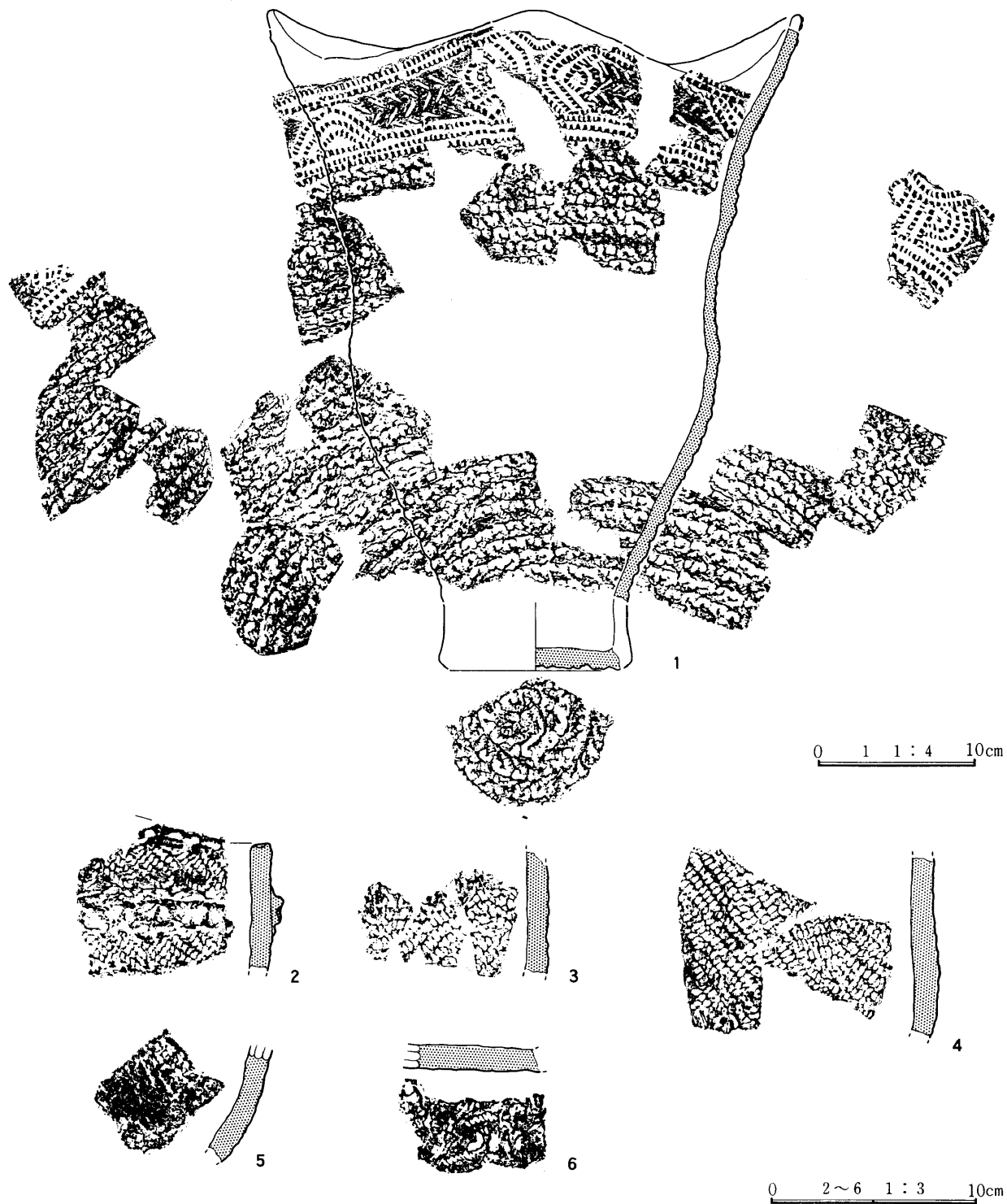
第5図 SI01実測図

ち上がり、口縁部で内弯気味に開く。口縁部には上端2条、下端3条の有刻細隆帯で区画し口縁部文様帯を設けている。波頂部には同細隆帯で縦位・横位の弧状文を組み合わせ、波底部には横位の弧状文、それらの間にはハの字状刺切文を充填するという構成である。口縁部文様帯以下は胴中央部まで多条ループLR、それ以下は多条ループLR・RLを羽状に施している。2は波状口縁部片でRL縄文地に幅広隆帯を貼り付けている。口唇部および隆帯上に半截状工具による刺突を施している。3～5は胴部片で3・4は同一個体である。3は上端に3本単位の櫛状工具によるコンパス文、4はLR・RL縄文により縦位羽状に施文している。5は胴下部の屈曲する箇所である。6は底部片で底面にも縄文を施している。石器に関しては7が珪質凝灰岩製の石鏃である。基部を抉入状に加工している。7・8は黒色頁岩製のスクレイパーで、9は粗粒輝石安山岩製の敲石である。

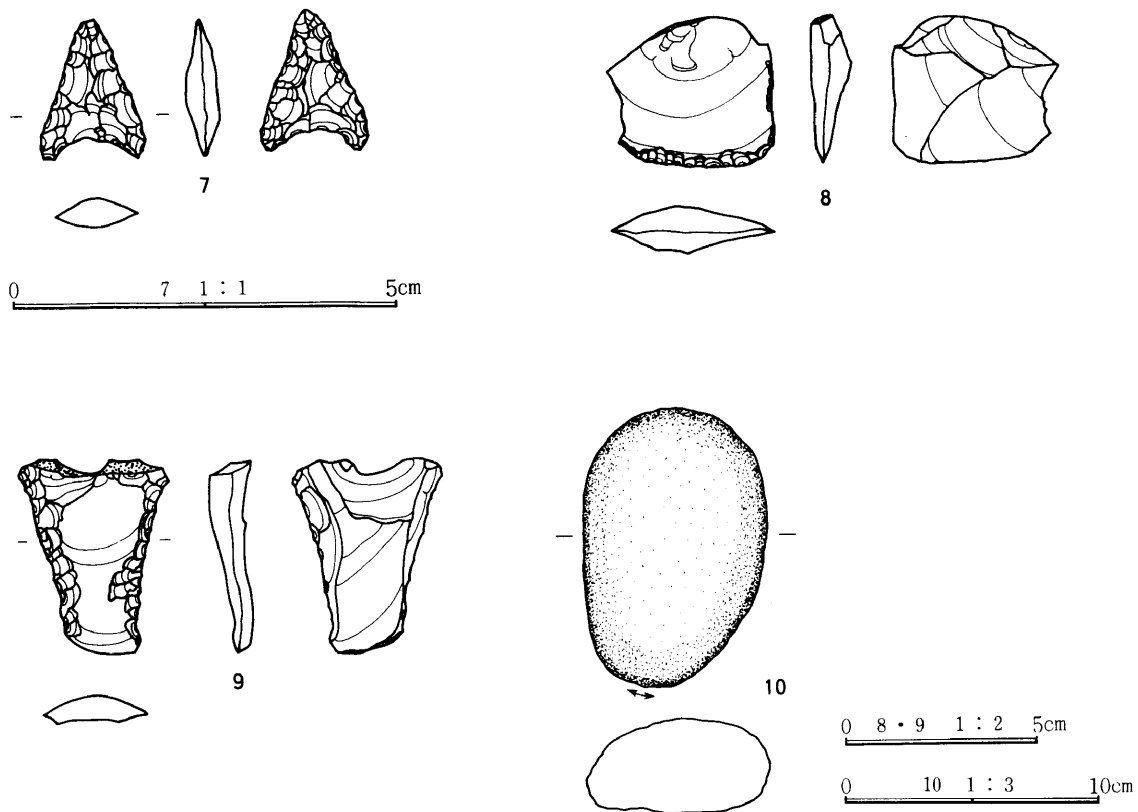
備考 本住居では剥片石器主要素材の割合は珪質凝灰(変質)岩24点 (52.2%)、黒耀石18点 (39.1%)、



第 6 图 SI01遺物出土状況図



第7图 SI01出土遺物実測図1



第8図 SI01出土遺物実測図2

黒色頁岩3点(6.5%)、デイサイト1点(2.2%)という内訳であった。珪質凝灰(変質)岩と黒耀石の出土点数は拮抗しているが黒耀石製の石器製品は出土していないことが特徴的である。また、アクセサリ類の素材である葉蠟石が1点出土している。

SI02 (第9～11図/PL. 2・4)

位置 調査区南側、F・G-10・11グリッド。

重複関係 なし。

遺存状態 西東隅を攪乱により失っており、東壁・南壁はローム下の軽石が露出していて不明瞭であるが住居の掘り込みがしっかりしているので比較的良好である。

覆土 暗褐色を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 平面形は東西方向に長軸を採る長方形を呈す。規模は長軸4.88～5.02m、短軸3.32～3.41m、床面積約15.0㎡を測る。

主軸方位 N-49°-E

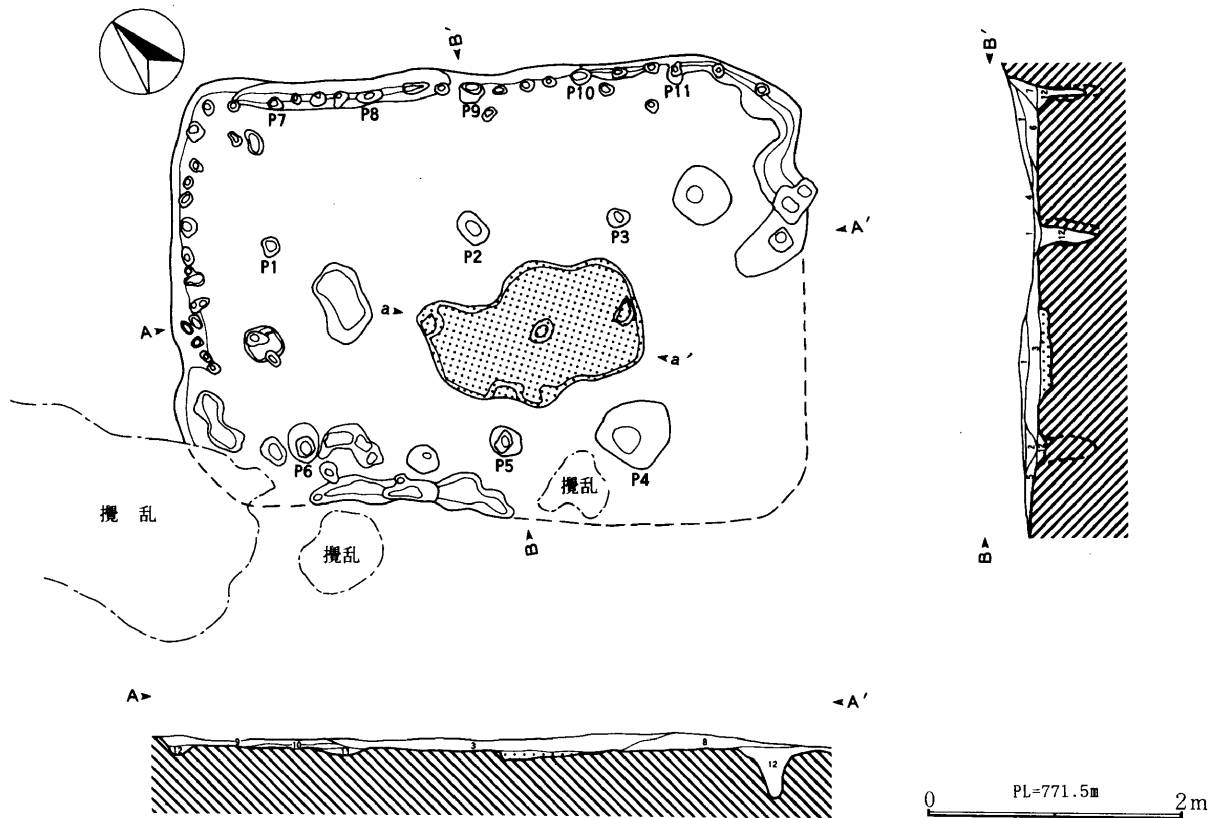
床面 床面は直床式で炉周辺は堅く締まっている。北側から南側へ緩やかな傾斜をもつが平坦に近い。

壁・壁溝 壁高は北壁で29cm程、西壁で25cm程を測る。壁溝は壁柱穴を繋ぐかたちで所々認められた。

柱穴 主柱穴はP1～P6の6本柱を想定した。この他に北壁・西壁に沿って柱穴列が検出されている。

柱穴列は径10～15cm程、床面からの深さが10～21cm程を基本とし、北壁では他より深さを有するP7～P11が等間隔で配置されている。また主軸上にあるP9・P2・P5は他に比べて深さを有していることが特徴的である。

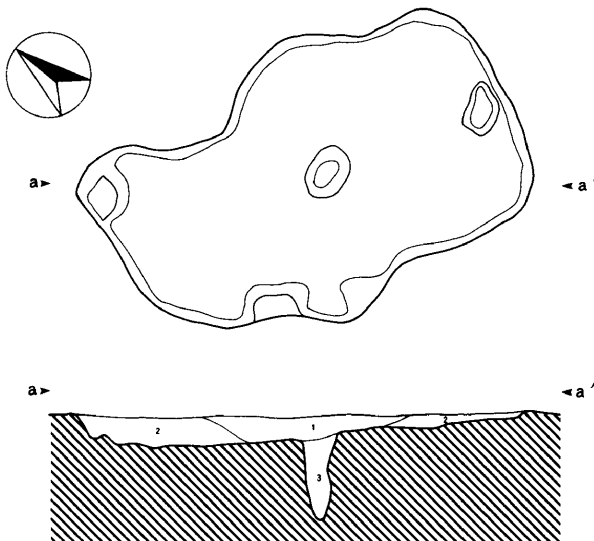
炉跡 床面を掘り込んで設置した地床炉である。住居の中央南側に位置する。住居の平面形と同様に東西に長軸を採る不整形を呈している。規模は長軸175cm、短軸74～110cm、床面からの掘り込みは最深で



SI02土層説明

AA' BB'

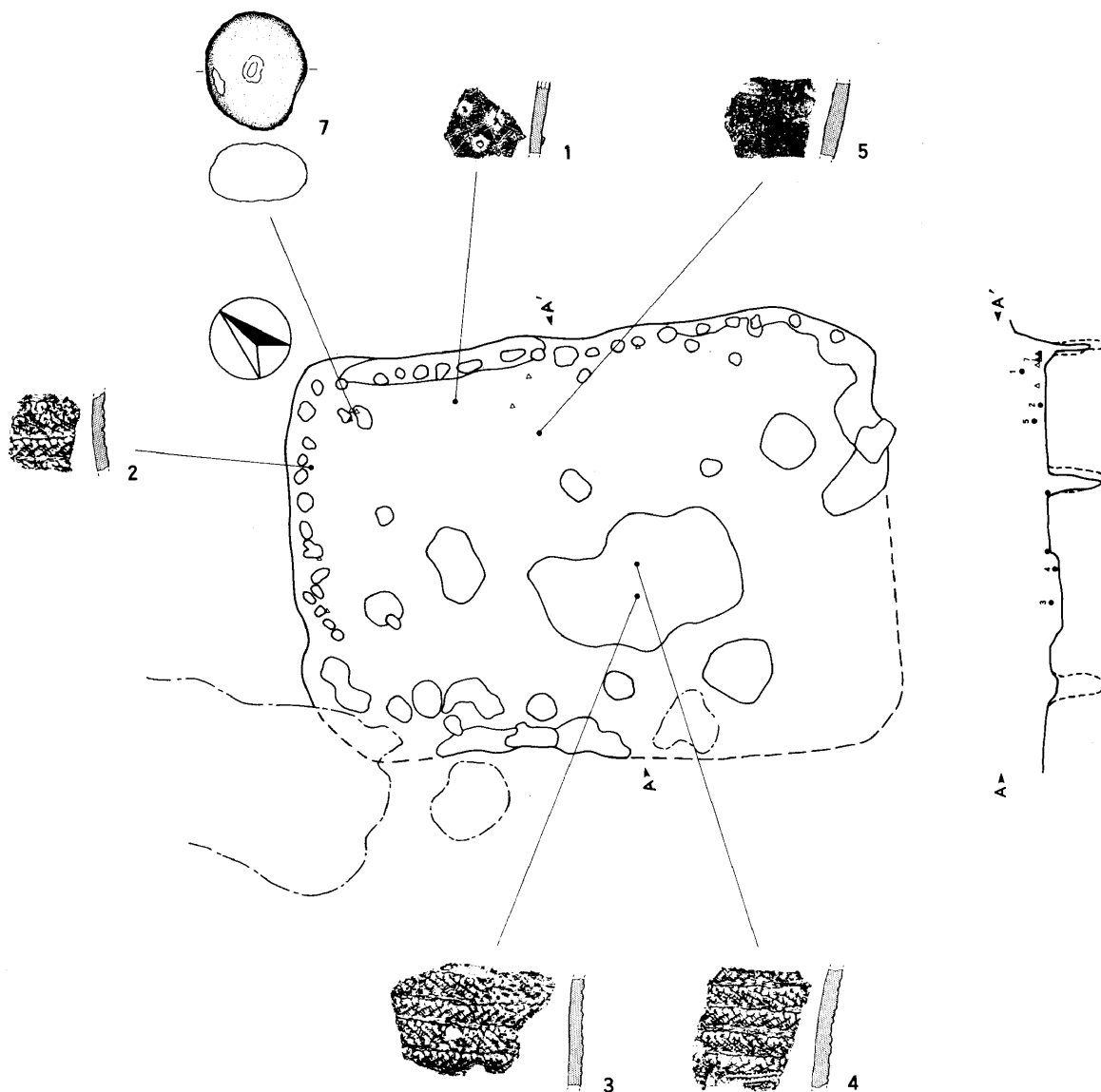
1. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・φ~1cm大のロームブロックを微量、焼土粒・炭化粒を少量含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・φ~1cm大のロームブロックを少量含む。
3. 明褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・φ~1cm大のロームブロックを多量、焼土粒・炭化粒を少量含む。
4. 明褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒を少量、φ~1cm大のロームブロックを多量に含む。
5. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・φ~1cm大のロームブロックを多量に含む。
6. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・焼土粒・炭化粒を含む。
7. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・φ~1cm大のロームブロックを多量に含む。
8. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒を微量、φ~2cm大の軽石を多量に含む。
9. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒を微量含む。
10. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・φ~1cm大のロームブロックを多量に含む。
11. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・φ~1cm大のロームブロックを含む。
12. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・φ~1cm大のロームブロックを少量含む。



a a' (新)

1. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・焼土粒・炭化粒を少量含む。
2. 明褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム粒・φ~1cm大のロームブロックを多量、焼土粒・炭化粒を少量含む。

第9図 SI02実測図



第10図 SI02遺物出土状況図

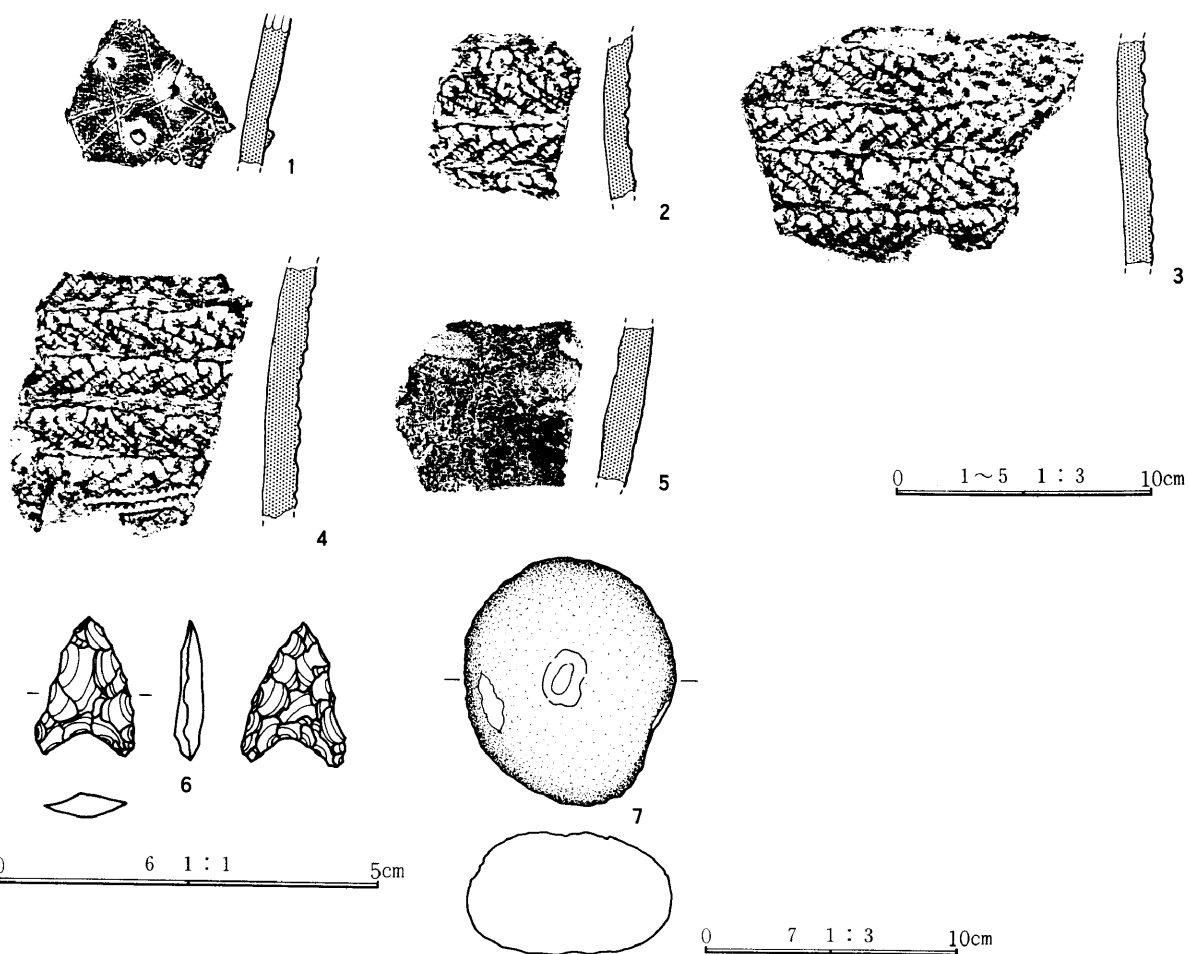
22cmを測る。

その他の施設 なし。

遺物検出状況 遺物は炉以外では北壁・西壁沿いに集中して検出されている。土器はすべて破片であり、石器を含む礫の出土が目立った。

遺物 総出土量は土器片6点、石器（礫・剥片を含む）51点である。そのうちの土器5点、石器2点を図示し得た。土器はすべて破片である。1はヘラ状工具による斜格子文上に瘤状突起を貼り付けている。2～4は同一個体で閉端環付のLR・RL縄文(0段多条)を施している。4から観察されるように胴部にヘラ状工具により2条の沈線を巡らしその上に刺突列を施すという構成である。5は煩雑なナデ調整で工具痕が観察される。石器に関しては自然礫が多く、石器と認定できるものだけを掲載した。6は珩質凝灰岩製の石鏃で基部を抉入状に加工している。7は粗粒輝石安山岩製の凹石で円形を呈している。

備考 本住居でもSI01と同様に珩質凝灰(変質)岩の剥片が顕著であった。剥片石器主要素材の割合は珩質凝灰(変質)岩25点(83.3%)、黒耀石4点(13.3%)、珩質頁岩1点(3.3%)である。またSK02出土



第11図 SI02出土遺物実測図

の珧状耳飾の素材でもある葉蠟石が3点出土している。

3. 土 坑 (土墳墓)

SK01 (第12図/PL. 2)

位置 調査区北側、I-4グリッド。

重複関係 埋没谷と重複し、これを切っている。

遺存状態 良好。

覆土 明褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸146cm、短軸80cm、確認面からは最深48cmを測る。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 細長く、凸凹があり、北東から南東に傾斜している。

遺物 なし。

備考 覆土が自然堆積を示していることから土坑と判断した。

SK02 (第12図/PL. 2・4)

位置 調査区東側、K-5グリッド。

重複関係 埋没谷と重複するが切り合いは不明である。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸127cm、短軸58～70cm、確認面からの深さは深い方で最深42cm、浅い方で13cmを測る。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 2段掘りで北側から南側へ緩やかに傾斜している。

遺物 石器2点のみの出土である。1は粗粒輝石安山岩製の磨石である。被熱によるひび割れが観察される。2は葉蠟石製の玦状耳飾で2分の1の遺存である。

備考 本遺構は埋没谷の掘り下げ途中で検出したため、上部構造(墓標)や覆土(一度に埋め戻されたか)は不明であるが副葬品と考えられる玦状耳飾、あるいは下部構造(抱石)の可能性が高い磨石の出土から土壌墓と認定した。また半截時に層位ごとに土壌を採取し、洗浄した結果、1層から数種に及ぶ炭化材が検出されている(第IV章-1)。

4. 畝状遺構(第12図/PL. 1)

位置 調査区西側、A・B・C-5・6グリッド。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 ローム粒を多く含む暗褐色土の単一層である。

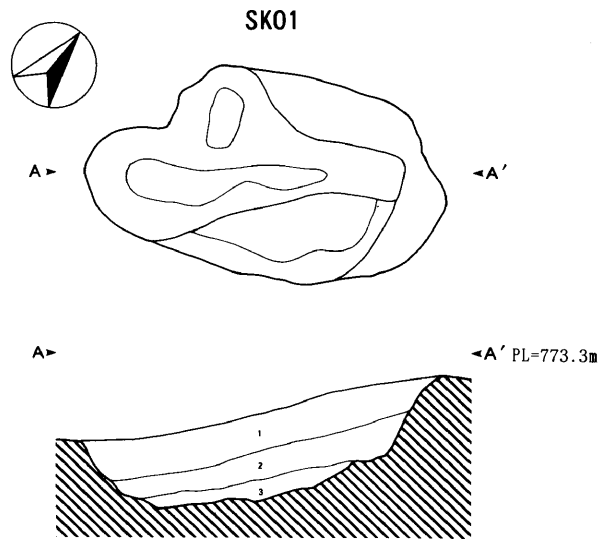
形状・規模 緩傾斜の等高線に平行して3条のサクが検出されている。ローム面での検出だったために関しては形状等を確認することができなかった。検出総長は約10m、畝幅は30～45cm、サク幅は20～30cmを測る。サク内には農耕具の鋤先の痕跡が顕著で、鋤先幅は12～15cm程である。鋤先痕から東側から西側への耕作であったことが窺える。

遺物 なし。

備考 本遺構はサクのみの検出で畝に関しては詳細を確認することができなかった。また遺物も検出されていないので帰属時期を特定することは困難であるが、遺構外で近世陶磁器(幕末期)が多く見られたことからそれ以降の所産であると考えられる。

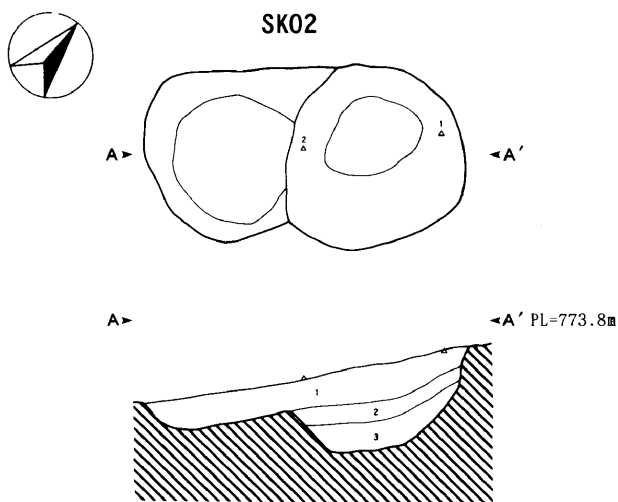
5. 遺構外出土遺物(第13・14図/PL. 4～6)

ここでは表土掘削や試掘調査の際に出土した遺構外出土の土器・石器をまとめて掲載する。総出土量は土器片84点、陶磁器片20点、石器(礫・剝片含む)33点である。土器は1点以外すべて破片でそのほとんどが前期前半関山式に該当するものである。その他は胎土や厚さから弥生土器と考えられるものが2点、時期不明のものが1点見られる。陶磁器はすべて近世幕末期に帰属するものである。このうち関山式土器と石器と認定できるものを掲載した。



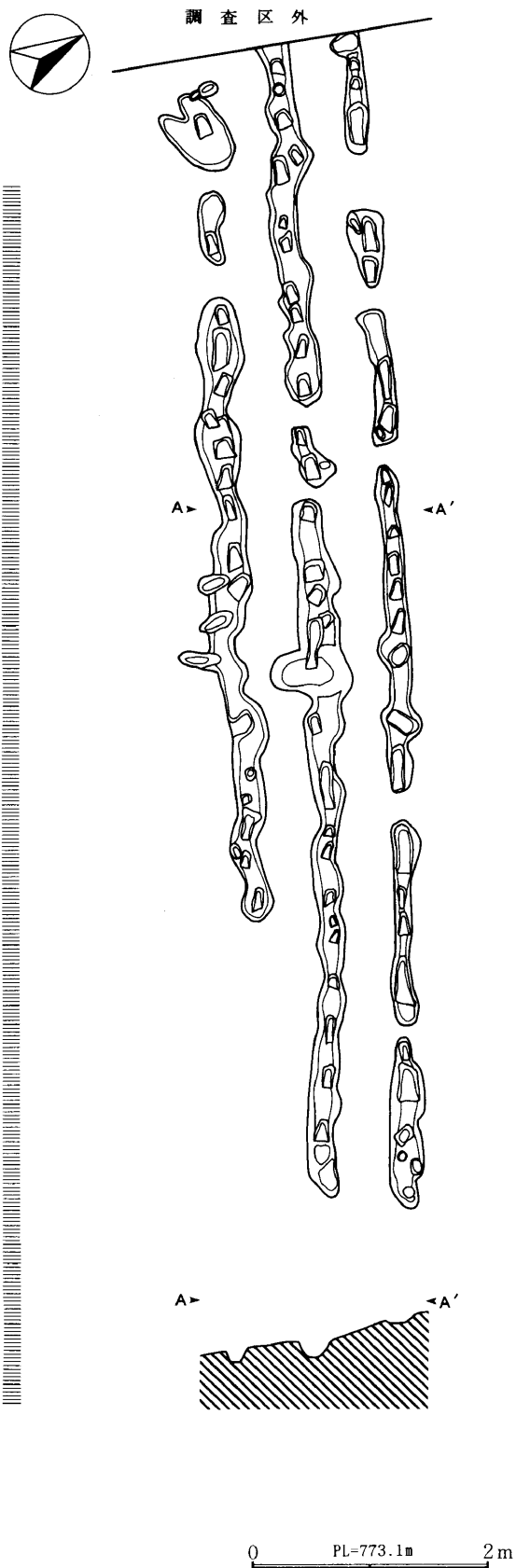
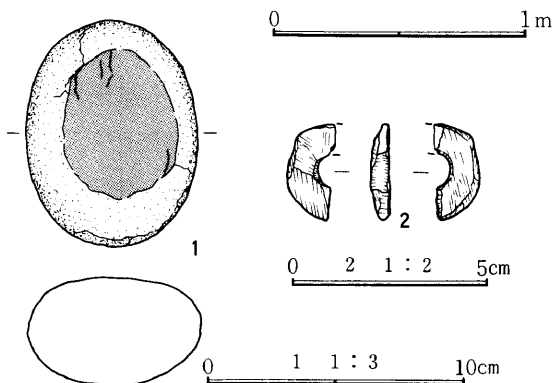
SK01土層説明
AA'

1. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。φ~1cm大の軽石を多量に含む。
2. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・φ~1cm大の軽石を含む。
3. 明褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム粒を多量、φ~1cm大の軽石を少量含む。

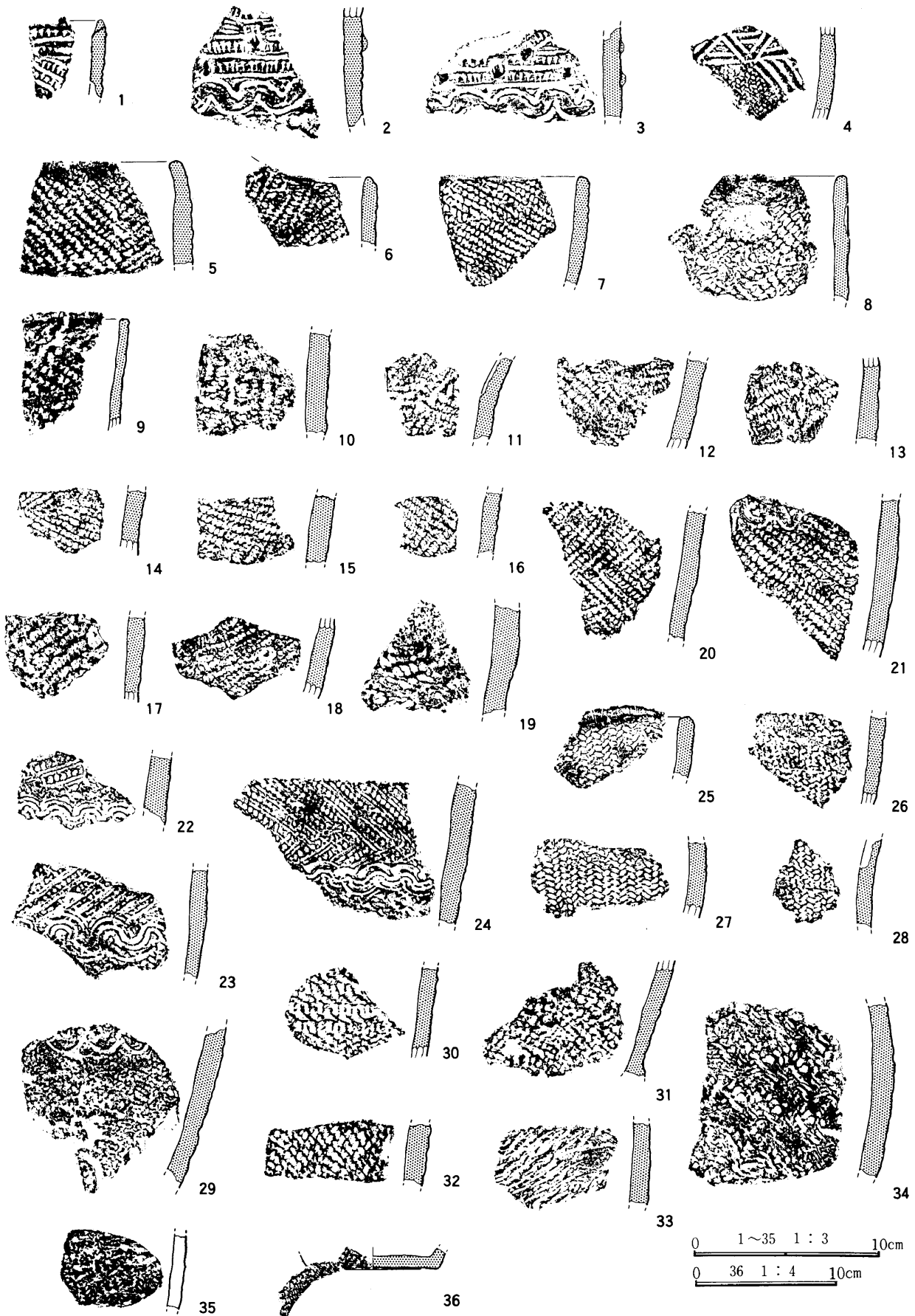


SK02土層説明
AA'

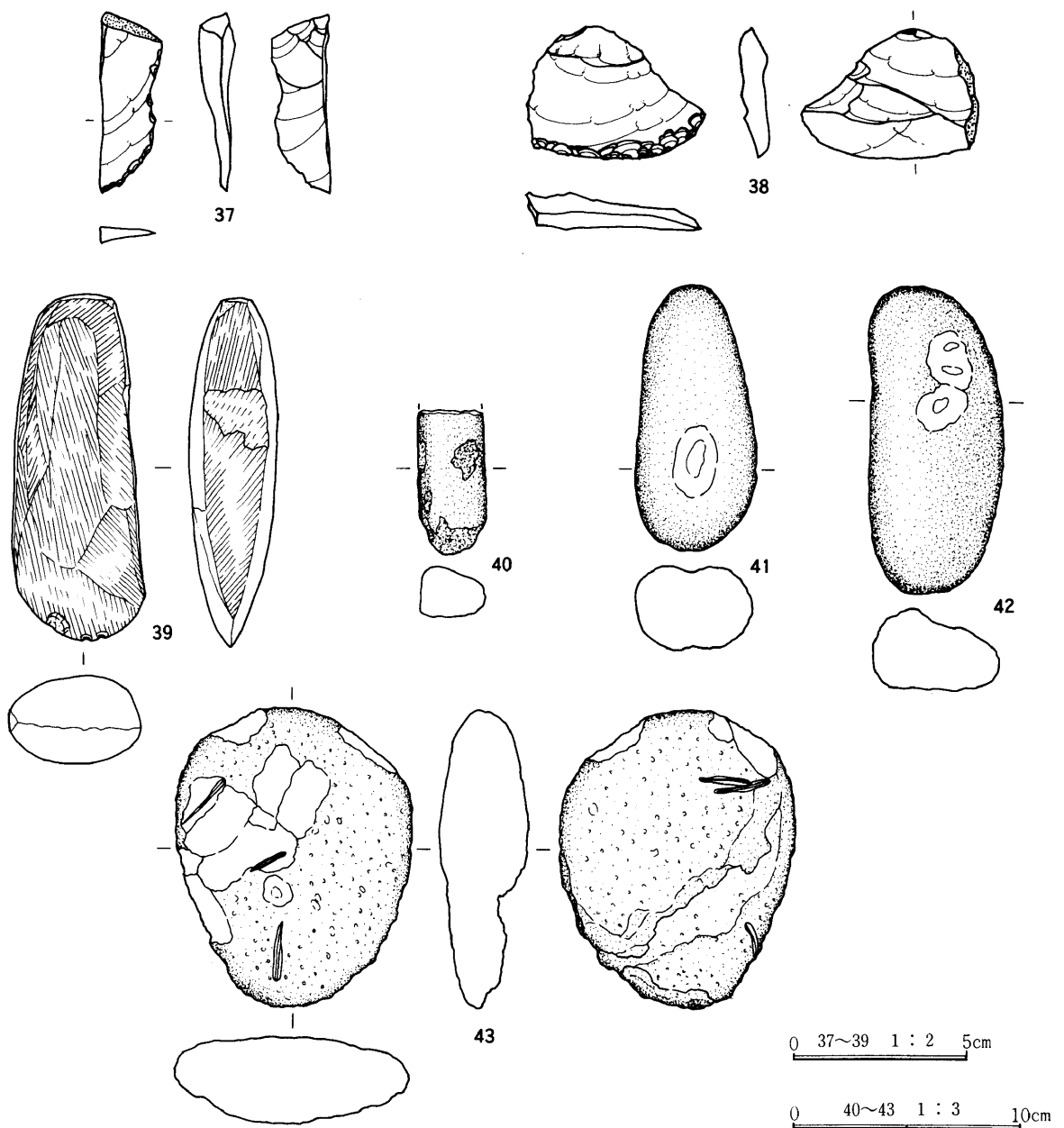
1. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・φ~1cm大のロームブロックを微量、炭化粒・φ~1cm大の軽石を含む。
2. 黒褐色土層：粘性なし。締まりややあり。φ~1cm大の軽石を含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・φ~1cm大のロームブロック・φ~1cm大の軽石を少量含む。



第12図 SK01・02および出土遺物実測図、畝状遺構実測図



第13図 遺構外出土遺物実測図1



第14図 遺構外出土遺物実測図2

1～4は口縁部文様帯を設ける類である。1～3は同一個体で、口唇部に小突起を貼付し、口縁部文様帯は梯子状沈線上に瘤状突起を貼付する類で関山I式に、4は組紐文を地文とし、口縁部に半截竹管文を施す類で関山II式にそれぞれ該当する。5～9は口縁部片で、5・8は0段のLR・RL縄文により縦位羽状縄文、6・7は斜縄文、9は横位羽状縄文を構成している。10～21胴部片である。10・13・17～19・21はLR・RL縄文により斜縄文、12は縦位羽状縄文、15・16・20は横位羽状縄文、11は0段多条のLR縄文+0段のRL縄文による横位羽状縄文を構成しており、13・16・17では0段多条を使用している。22～24は直前段反撚り(正反の合)+コンパス文という構成の類、25～28は組紐文を地文とする類とともに関山II式に該当する。29は摩耗していて不明瞭であるが羽状構成の縄文地にコンパス文、30は多条ループ文、31は複節の0段多条、32は前々段反撚り(0段多条)、33は直前段反撚り、34は2本の異なる

原体による結節を施している。このうち30は関山Ⅰ式に該当する。35はいわゆる束の縄文でハの字状を呈しており、胎土に繊維を含んでいない。中部高地の神ノ木式に該当しよう。36は若干上げ底の底部で外面には縦位羽状縄文(0段多条)を施している。石器に関しては37・38は黒色頁岩製の剥片石器で37が縦形、38が横形のスクレイパーである。39は凝灰質砂岩製の磨製石斧で側縁に再生の痕跡が認められる。40～43は粗粒輝石安山岩製の礫石器で、40は棒状の敲石である。41・42は凹石でともに長形を呈している。43は剥離痕・線状痕の顕著な石器で6箇所線状痕が認められる。

第IV章 自然科学分析

1. 暮坪遺跡出土炭化材の樹種同定

植田 弥生 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

当遺跡は、長野原市大字羽根尾に所在し、標高約770mの尾根上に立地している。ここでは、縄文時代前期前半の住居跡 SI01と土壙墓 SK02から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。恐らく全国的に見ても、縄文時代前期の住居跡や土壙墓の遺構から出土した炭化材の樹種調査が実施された事例はあまり知れていないので、当時の樹種利用を知る貴重な資料である。

2. 炭化材試料と樹種同定の方法

遺構から出土した炭化材は、小さな破片であった。取り上げられた試料袋の中には、複数の破片が入っていた。同定結果に偏りが出ない様に、可能な限り大小の破片について樹種同定を行った。炭化材は脆く壊れやすいのでこれらの破片は、埋積中または取り上げ後にも割れて複数になっている可能性がある。結果は、検出された各分類群のみを提示し確認した破片数は記入していない。

樹種同定は、炭化材の3方向断面を走査電子顕微鏡で拡大してその材組織を観察して行った。横断面（木口）は炭化材を手で割り新鮮な平滑面を出し、接線断面（板目）と放射断面（柁目）は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

3. 結 果

住居跡 SI01からは、クリとケヤキが検出された。土壙墓 SK02の1層から採取された炭化材からは、複数の落葉広葉樹材が検出された。その樹種は、コナラ属・コナラ節・クリ・ケヤキ・ヤマグワ・アジサイ属・カエデ属・ニワトコであった。

第3表 暮坪遺跡出土木材の樹種同定結果

遺 構	樹 種
住居跡 SI01	クリ ケヤキ
土壙墓 SK02 1層	コナラ属コナラ節 クリ ケヤキ ヤマグワ アジサイ属 カエデ属 ニワトコ

検出された分類群の同定根拠となった材組織の観察結果を以下に記載する。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus*. subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 PL.7 1 a-1 c (SK02)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、孔圏外は薄壁・角形の非常に小型の管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、内腔にチロースが発達している。放射組織は単列と集合状で、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する高木となる落葉広葉樹で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 PL.7 2 a-2 c (SK02)

年輪の始めに大型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、孔圏外では非常に小型の管孔が火炎状に配列している環孔材。道管の穿孔は単一、内腔にはチロースが発達している。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の高木となる落葉広葉樹である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 PL.7 3 a-3 c (SI01)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、孔圏外は小型や非常に小型の管孔が多数集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形、上下端や縁に結晶細胞がある。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する高木となる落葉広葉樹である。

ヤマグワ *Morus australis* Poiret クワ科 PL.8 4 a-4 c (SK02)

年輪の始めに中型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では小型と非常に小型の大きさの不揃いな管孔が集合し斜状・波状に配列する環孔材である。道管の壁孔はやや大きくて交互状、穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚があり、内腔にはチロースがある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形で上下端に方形細胞があり、道管との壁孔は大きくて交互状に配列している。

ヤマグワは高木となる落葉広葉樹で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布する。

アジサイ属 *Hydrangea* ユキノシタ科 PL.8 5 a-5 c (SK02)

非常に小型の管孔がおもに単独で散在し、年輪界では管孔の径は小さくなる散孔材。道管の壁孔は階段状から交互状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔、内腔には水平のチロースが発達している。放射組織は異性、主に2細胞幅で2細胞幅の部分は平伏細胞からなりその上下端の単列部は非常に軸方向に長い直立細胞からなる。放射柔細胞と道管との壁孔は対列状・階段状である。

アジサイ属はおもに暖帯から温帯下部に分布する低木の落葉広葉樹で、山中の川岸に生育するタマアジサイや山林下に普通のコアジサイ・ガクウツギ、日当りのよい開けた土地や山中に生育するノリウツギ、ツル性のツルアジサイなどがある。ツルアジサイは放射組織の細胞高が非常に高い点で区別されるが、そのほかの種類は材組織が類似していて区別はできていない。

カエデ属 *Acer* カエデ科 PL.8 6 a-6 c (SK02)

小型の管孔が単独または放射方向に2～3個が複合して均一に散在し、年輪界は不明瞭な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～4細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きく整然と交互状に配列する。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育する高木となる落葉広葉樹で、約26種と多くの変種が知られている。

ニワトコ *Sambucus racemosa* Linn. subsp. *Sieboldiana* (Miquel) Hara スイカズラ科 PL.9 7 a-7 c (SK02)

年輪の様々な方向に複合したやや小型の管孔が散在し、年輪の始めは分布数が多く年輪界では扁平で極めて小型の管孔が帯状の配列する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、おもに3細胞幅の紡錘形で縁に鞘細胞が見られる。放射組織と道管の壁孔はやや大きく交互状である。

ニワトコは本州以南の暖帯から温帯の山野に普通の低木の落葉広葉樹である。

4. まとめ

縄文時代の遺跡から出土する代表的樹種としてクリは非常に有名である。当遺跡においても、住居跡SI01と土壌墓SK02からクリが出土した。クリは、その果実は食料として、材は粘りがあり耐朽性にすぐれているため柱材に多く使われており、集石炉からの出土例も多いことから燃料材としても多用されていた。またコナラ節とヤマグワもクリと同様に、果実は食用となり材も建築材や道具類そして燃料材にも多用されていた事が知られている。

土壌墓SK02の1層に含まれていた複数種の広葉樹の炭化材は、どのような経緯で炭化して1層内に包含されたのかは不明であるが、その樹種構成は当遺跡の標高(770m～776m)から類推される温帯下部の落葉広葉樹林に含まれる樹種と類似しているため、遺跡周辺の森林を利用していたことが好く判る。

2. 暮坪遺跡から出土した炭化種実

新山 雅広 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

暮坪遺跡は、群馬県長野原町大字羽根尾に所在する。ここでは、縄文時代前期前葉と考えられている住居跡(SI01)から出土した炭化種実の同定結果を報告する。

2. 出土した炭化種実

炭化種実の検討は、試料名：②暮坪遺跡SI01炭化種子の1試料について行った。検討した結果、炭化種実はクリ炭化子葉であった。クリは食用となる利用植物であり、当時の食料源の1つであったと考えられる。

3. 形態などの記載

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 炭化子葉 PL.9

大半は破片であり、2個体のみほぼ完形（一部欠損）であった。1つは、長さ約13mm、幅不明、厚さ約9mmであり、もう1つは、長さ不明、幅約15.5mm、厚さ約7.5mmである。いずれも大きさはやや小さいといえよう。全体の個数としては、重量換算して20個前後と考えられる。

3. 暮坪遺跡出土の黒耀石製石器の原産地推定

小林克次

1. はじめに

黒耀石は、先史時代の石器石材としてよく用いられるものの一つである。時には、その原産地より数百km離れた場所から出土することが知られている。このような、原産地からの黒耀石の移動が、自然の営力によるものでなかったらならば、そこには何らかの人間活動が介在していたはずである。遺跡出土の黒耀石製石器の原産地を知ることは、その活動の具体的な証拠を得ることになる。

近年、黒耀石の原産地推定については、理化学的な手法が発達し、また考古学的な遺物にさかんに応用されている。その中でも多く行われているものの一つとして、蛍光X線分析法がある。この方法は、大量の黒耀石資料を迅速かつ非破壊に分析できる点が評価されている。

ここでは、この蛍光X線分析法により、暮坪遺跡出土黒耀石製石器の原産地推定を行った結果を報告する。

2. 分析資料

原産地資料は第4表に示した中部・関東地方を中心とした主な黒耀石原産地である。遺物は暮坪遺跡の1号住居跡(SI01)と2号住居跡(SI02)から出土した黒耀石製の碎片計23点を分析対象資料とした。

3. 分析方法

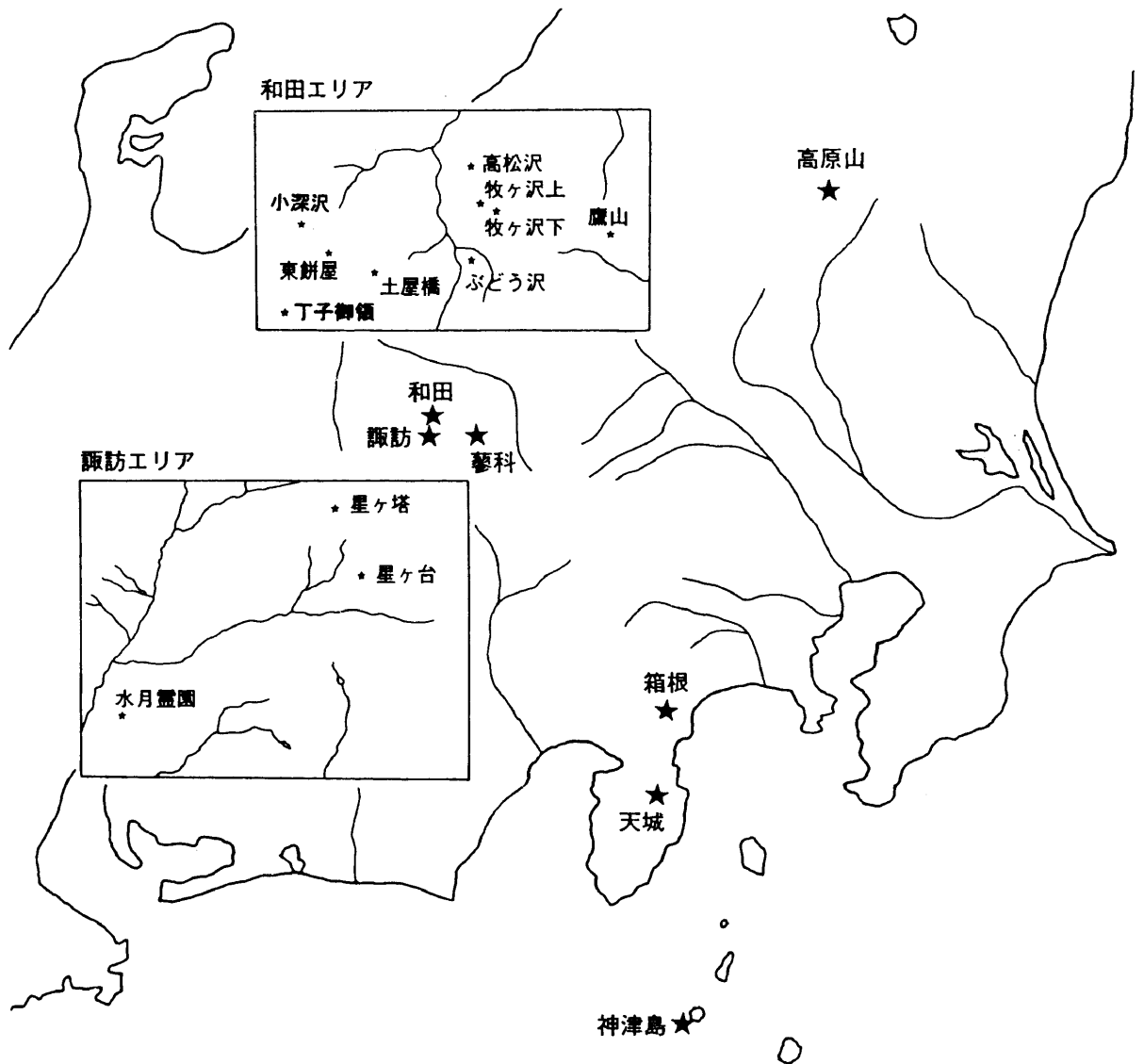
分析に用いた装置は、沼津高専望月研所有のSeiko Instruments社製エネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2110Lである。分析条件は以下の通り。管球：ロジウム(Rh)管球、検出器：Si(Li)半導体検出器、X線照射径：10mm、管電圧：50kV、管電流：自動設定、雰囲気：真空雰囲気、測定時間：180sec。

同定し、蛍光X線強度を測定した元素は以下の11元素である。アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)。以上の条件を設定し、ルーチン化して測定を行った。

4. 結果

分析結果から、原産地推定を行う方法は、望月らの方法を用いた(望月ほか1994、望月1997、小林1999)。望月らの方法は、図を用いた判別図法と、統計的な手法である判別分析とを組み合わせ用いている。

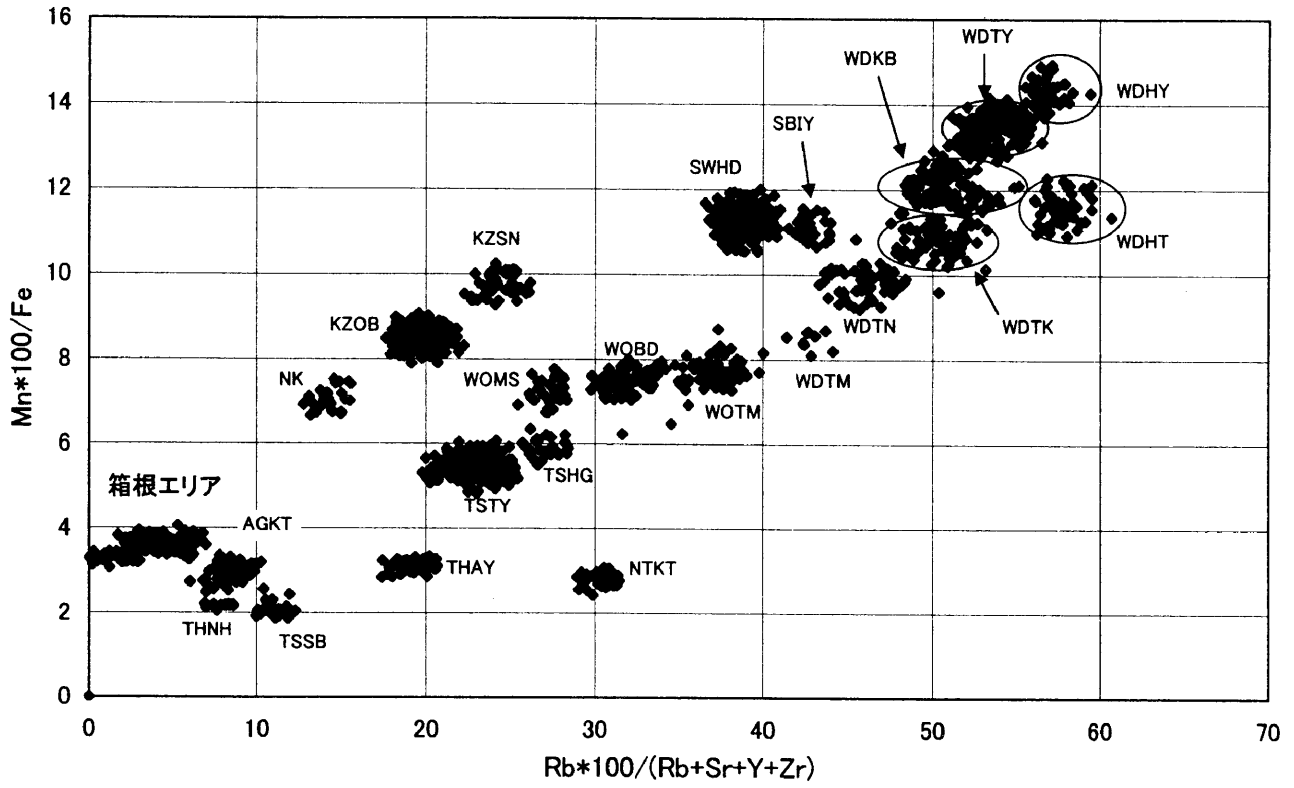
第16・17図に黒耀石原産地を判別するための判別図を示した。第18・19図は、暮坪遺跡出土黒耀石の原産地推定のための判別図である。この結果をまとめたものを、第5表・第20図に示した。第5表中の、



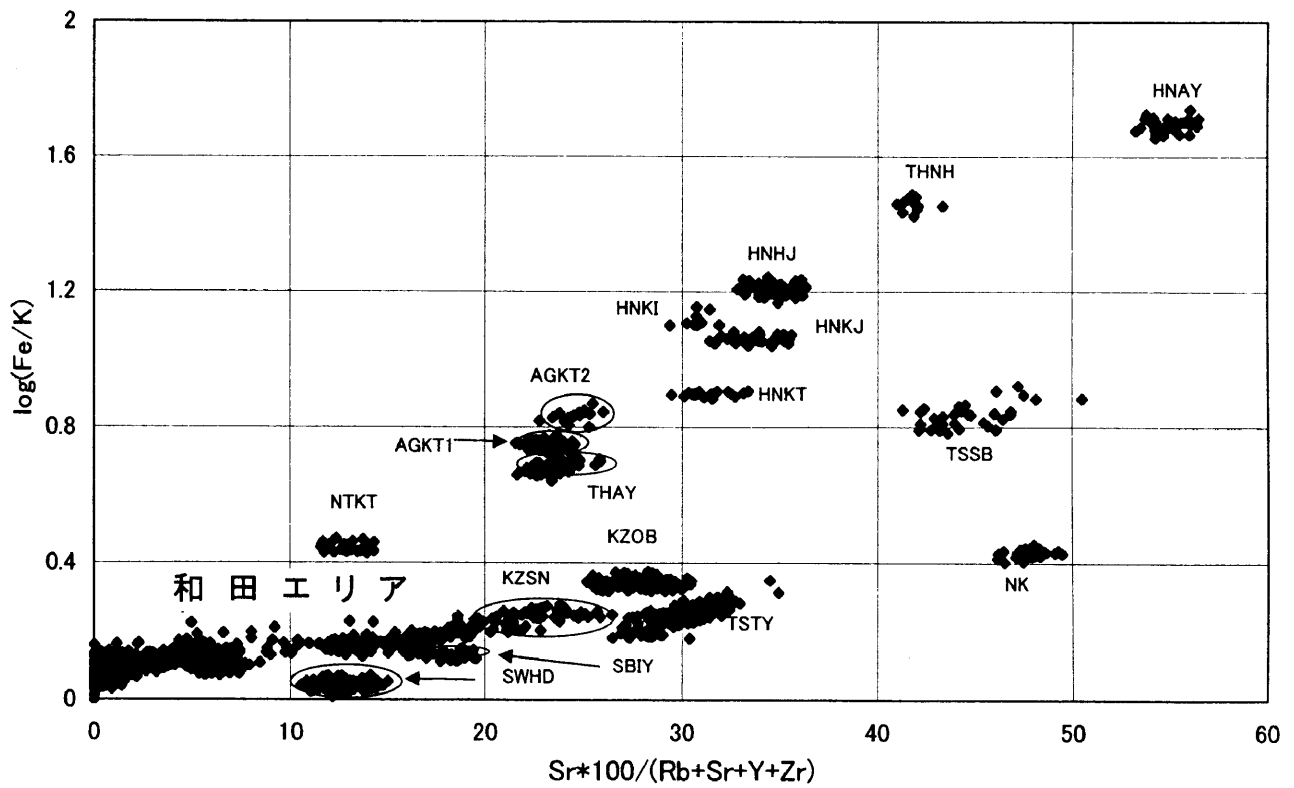
第15図 関東・中部地方の黒耀石原石採取地点 (小林1999)

第4表 関東・中部地方の黒耀石原産地一覧

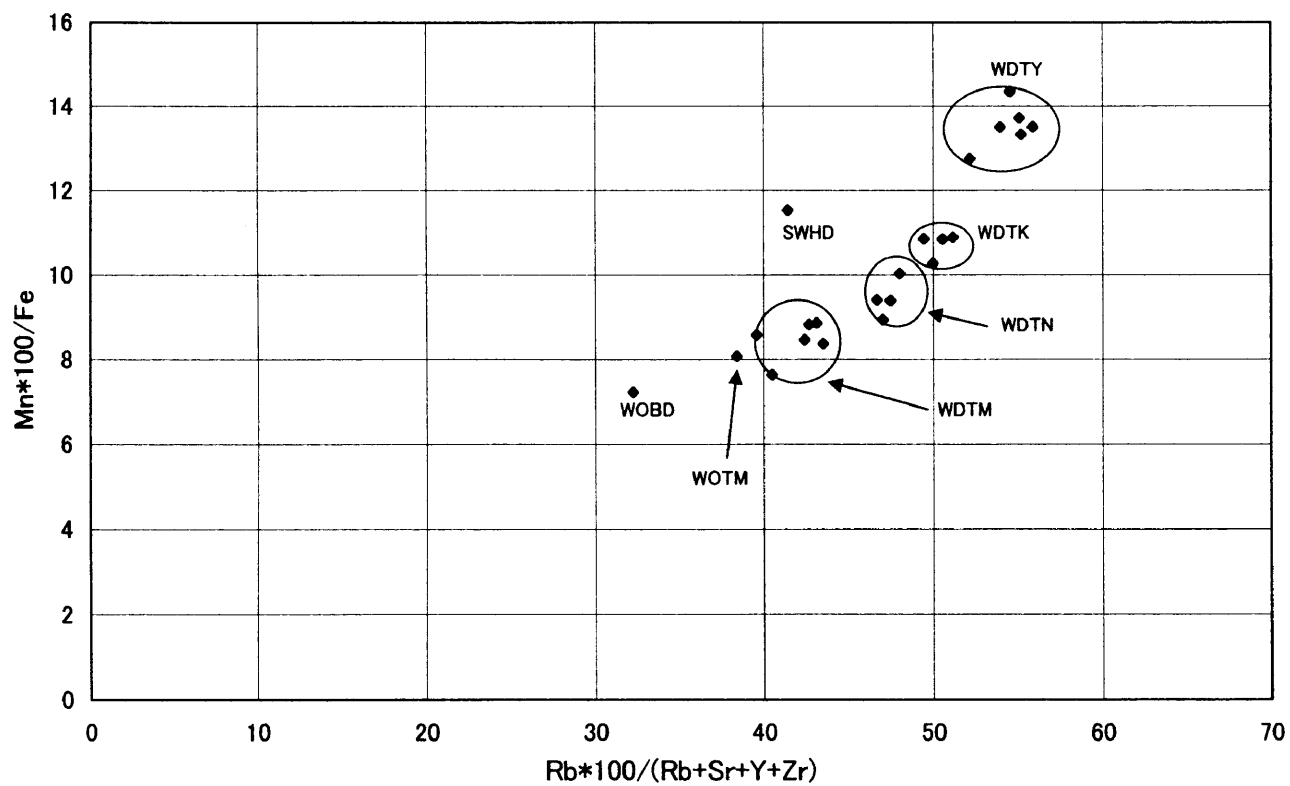
都県	エリア	採取地域・番号	判別群記号	分析数	都県	エリア	採取地域・番号	判別群記号	分析数			
長野	和田 (WD, WO)	芙蓉ライト HY	WDHY, WDTY, WDTK	54	神奈川	諏訪 SW	星ヶ塔	SWHD	80			
		古峠 HT	WDHT	40			星ヶ台 HD	SWHD	20			
		和田トンネル北 TUN	WDHT	18			水月霊園	SWHD	20			
		小深沢 KB	WDTY, WDKB	40		箱根 HN	畑宿群 HJ	HNHJ	71			
		東餅屋	WDTY	40			鍛冶屋群 KJ	HNKJ	30			
		土屋橋北 TK	WDTY, WDKB	40			上多賀群 KT	HNKT	29			
		丁字御領	WDTY	19			芦ノ湯群 AY	HNAY	10			
		鷹山 TY	WDTY, WDKB	50			黒岩橋群 KI	HNKI	9			
		土屋橋西 TY	WDTK, WDTN, WDTM	20			大観山	HNHJ, HNAY, HNKI	11			
		土屋橋南1 TM	WDTK, WDTN, WDTM	20			甘酒橋	HNHJ, HNAY	30			
		土屋橋南2 TM	WDTK, WDTN, WDTM	20			日金山群 HG	HNHG	12			
		ぶどう沢 BD	WOBD, WOTM	22			天城 AG	柏峠群 KT	AGKT	49		
		牧ヶ沢下 MS	WOMS	21				神津島 KZ	恩馳島群 OB	KZOB	49	
		牧ヶ沢上	WOBD, WOTM	33		砂糠崎群 SN	KZSN		40			
	高松沢 TM	WOBD, WOTM	39	沢尻湾	KZOB	9						
	麦草峠	TSTY	40	長浜	KZOB, KZSN	20						
	野	蓼科 TS	麦草峠東	TSTY	35	栃木	高原山 TH	甘湯沢群 AY	THAY	48		
			冷山 TY	TSTY	33			七尋沢群 NH	THNH	9		
			渋ノ湯	TSTY	29			宮川	THNH	8		
			双子池 HG	TSTY, TSHG	20			自然の家	THNH	10		
			擂鉢山 SB	TSSB	26			新潟	新津 NT	金津群 KT	NTKT	31
			不明	中ツ原IG 地点出土	NK					30	新発田 SB	板山牧場群 IY



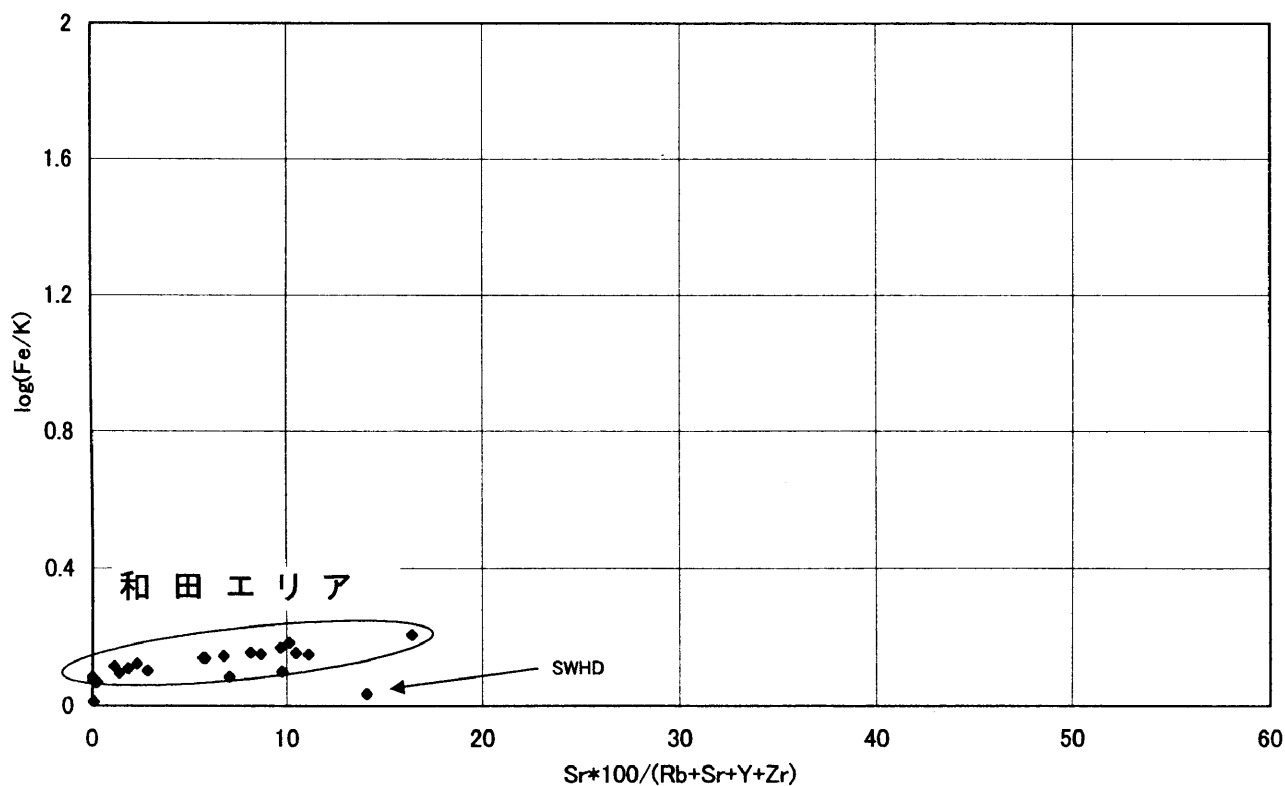
第16図 関東・中部地方の黒耀石原産地判別図 1



第17図 関東・中部地方の黒耀石原産地判別図 2



第18図 暮坪遺跡出土黒耀石の原産地判別図 1



第19図 暮坪遺跡出土黒耀石の原産地判別図 2

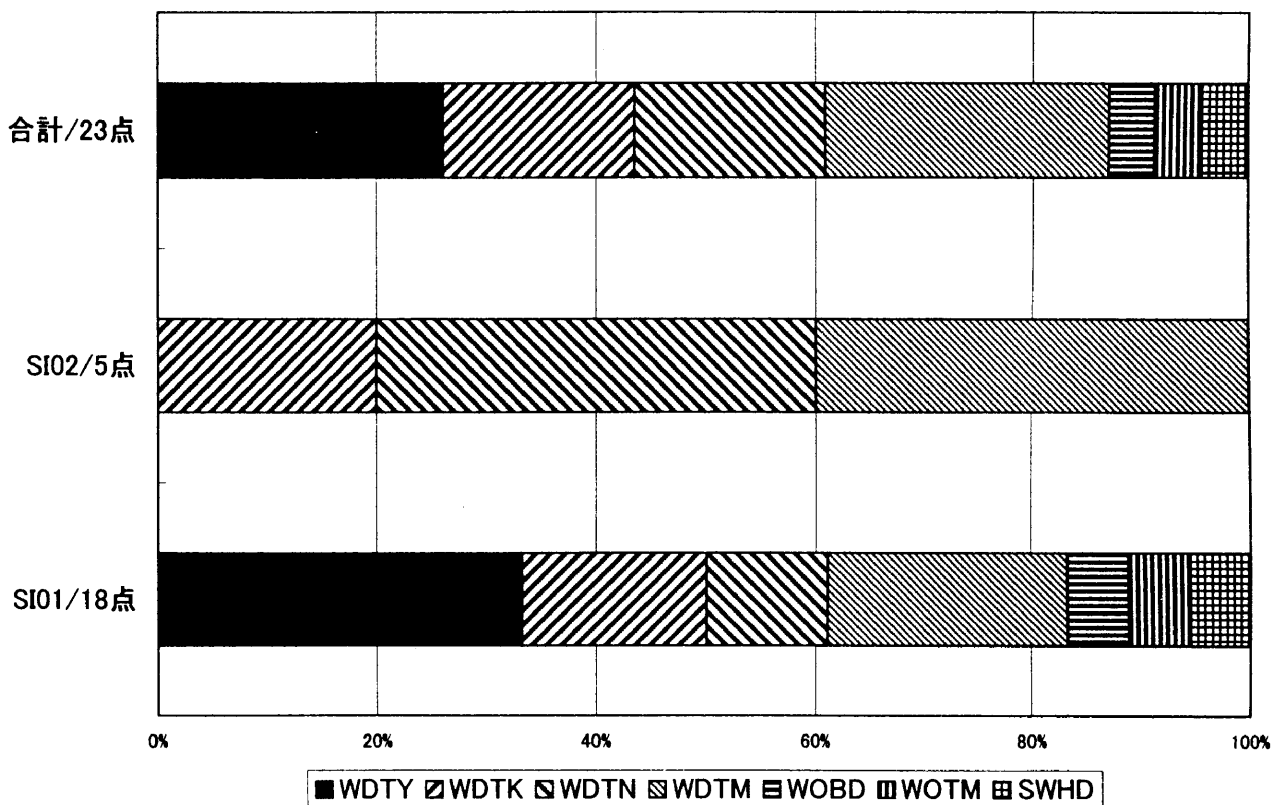
判別群は判別図による原産地推定結果を、候補1・2は判別分析によるもっとも帰属確率の高い原産地と2番目に高い原産地を示している。また、距離1・2と確率1・2はそれぞれ、候補1・2の産地群と分析遺物とのマハラノビス距離と、その産地群への分析遺物の帰属確率を示している。

参考文献

1. 望月明彦・小林克次・池谷信之・武藤由里 1994「遺跡内における黒耀石製石器の原産地分布について—沼津市土手上遺跡 BBV 層の原産地推定から—」『静岡県考古学研究』26
2. 望月明彦 1997「蛍光X線分析による柏ヶ谷長ヲサ遺跡出土黒耀石製石器の産地推定」『柏ヶ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡
3. 小林克次 1999「蛍光X線分析法による鷹山地区出土黒耀石製石器の原産地推定分析」『鷹山遺跡群III』長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団

第5表 暮坪遺跡出土黒耀石製石器の原産地推定結果

住居址	WDTY	WDTK	WDTN	WDTM	WOBD	WOTM	SWHD	合計
SI01/18点	6	3	2	4	1	1	1	18
SI02/5点	0	1	2	2	0	0	0	5
合計/23点	6	4	4	6	1	1	1	23



第20図 暮坪遺跡出土黒耀石の原産地判別結果

第V章 ま と め

今回の調査で縄文時代前期前葉二ツ木式期の住居跡2軒、土坑2基(うち1基は土墳墓)、幕末以降の畝状遺構が検出された。調査区は周囲の傾斜地の中でも平坦面を形成している箇所、未調査部分を除いて面的に掘削したが、時期の特定できる遺構は上記の二ツ木式期の住居跡2軒で、この他に小形の塊状耳飾を出土したSK02が住居跡と同時期の土墳墓と考えられるのみである。遺構外出土遺物で直後の関山式土器が認められたことから、付近に継続して集落を営んでいることが想定される。当該期の遺構は長野原町で初検出であり、県下でも赤城山西～南麓の勢多郡域を除けば稀少な検出事例といえよう。

ここでは本遺跡の立地について若干触れ、まとめとしたい。

第II章で述べたように本遺跡の周辺遺跡は吾妻川沿岸・その支流沿いの河岸段丘に占地することを基本としている。しかしながら本遺跡は丘陵上の吾妻川に面する緩傾斜地に占地している。このような遺跡の在り方は中世羽根尾城が隣接していることから分かるように、中世城館関連の遺構以外にほとんど把握されていないのが現状である。これまで認識されていないといえればそれまでだが、長野原町の遺跡分布調査で把握している遺跡の中では特異な在り方である。

本遺跡と同様の立地で調査されている町内遺跡として楡木II遺跡を挙げることができる。楡木II遺跡は八ツ場ダム・広規格道路関連で(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により平成12年度から調査されており、これまでに竪穴式住居跡は縄文時代早期前半撚糸文期14軒、前期黒浜式期6軒、中期前半2軒、平安時代15軒が検出されている⁽¹⁾。縄文時代早期前半撚糸文期の住居検出数で言えば、赤堀町今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡に次いでおり⁽²⁾、今後の調査で増える可能性が高い。

また楡木II遺跡とほぼ同時期の遺跡として石畑岩陰遺跡がある。JR(旧国鉄)の吾妻線防壁工事の際に発見され、昭和53年に群馬県教育委員会により調査が実施されている。テラス部のみの調査だったが、中期を除く縄文時代早期～晩期の土器・石器・獣骨が層位を成して確認されている⁽³⁾。

以上のように現段階で本町の遺跡分布では縄文時代の古い段階には岩陰、あるいは河岸段丘の上位～それ以上の尾根上を居住域とし、中期後半になると河岸段丘に大きく集落が展開するという傾向を指摘できよう⁽⁴⁾。この傾向を含む本地域での縄文人の動態は吾妻川沿岸の溪谷という狭い地形や当時の気候・周辺環境など様々な事象に起因していることが考えられるが、その解答は今後この地域での調査が教えてくれるであろう。

註

1. 麻生敏隆氏の御教示による。
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000『遺跡は今』第9号
2. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『多田山の歴史を掘る』VOL.2
平成11年度までに今井三騎堂遺跡で早期前半の住居跡が15軒、さらに同一集落と考えられる今井見切塚遺跡でも平成12年度に数軒検出されている。
3. 巾 隆之 1988「石畑岩陰遺跡」『群馬県史』資料編1 群馬県
巾 隆之 1999「石畑岩陰遺跡」『群馬県遺跡大辞典』上毛新聞社
4. 吾妻川下流域の県指定史跡である八木沢清水遺跡でも早期の竪穴式住居跡が確認されており、立地は本遺跡・楡木II遺跡と同様に河岸段丘上ではなく丘陵上である。この傾向を支持する事例といえよう。
石坂 茂 1997『八木沢清水遺跡』小野上村教育委員会

SI01出土土器観察表

挿図No	図版No	器種	法量 (器高/口径/底径) (cm)	文様と調整	原体	焼成	混和材	色調 (外面/内面)	備	考
7-1	3	深鉢	<42.5>/<34.0>/<12.3>	波状口縁。口縁部文様帯は上端2条・下端3条の有列細隆帯で区画し、波長部・波底部に同細隆帯による弧状文を縦位・横位に施文。無文部にはハの字状刺切文を充填。以下は多条ループ文。内面はナデ。	多条ループ (LR・RL)	良	角閃石・繊維	明黄褐/にぶい黄褐	口縁部～底部30%残存。	床直
2	3	深鉢	(6.1)/-/—	波状口縁。粘土帯。口唇部・粘土帯に半載状工具による刺突。内面はナデ。	縄文 RL	良	角閃石・長石・繊維	橙	破片資料 (口縁部)	覆土
3	3	深鉢	(5.8)/-/—	上端に3本単位縦描波状文、以下縦位羽状縄文。内面は横位ミガキ。	縄文 RL	良	繊維	黒褐/にぶい黄橙	破片資料 (胴部)	覆土
4	3	深鉢	(8.6)/-/—	縦位羽状縄文。内面は横位ナデ。	縄文 LR・RL	良	角閃石・繊維	灰黄褐	破片資料 (胴部)	覆土
5	3	深鉢	(5.7)/-/—	斜縄文。内面はナデ。	縄文 LR	良	角閃石・繊維	にぶい黄褐/黒褐	破片資料 (胴下部)	覆土
6	3	深鉢	/-/ (6.6)	底面に縄文施文。内面はナデ。	縄文 RL	良	角閃石・繊維	黒褐/にぶい黄橙	破片資料 (底部)	覆土

SI02出土土器観察表

挿図No	図版No	器種	法量 (器高/口径/底径) (cm)	文様と調整	原体	焼成	混和材	色調 (外面/内面)	備	考
11-1	4	深鉢	(5.9)/-/—	口縁部文様帯斜格子状沈線地に瘤状突起貼付。内面は横位ミガキ。		良	繊維	褐/にぶい黄褐	破片資料 (口縁部)	下層
2	4	深鉢	(6.5)/-/—	羽状ループ文。内面は横位ナデ。	縄文 LR・RL (0段多条)	良	角閃石・繊維	黒褐/にぶい黄褐	破片資料 (胴部)	2～4は同一個体。下層
3	4	深鉢	(8.8)/-/—	羽状ループ文。内面は横位ナデ。	縄文 LR・RL (0段多条)	良	角閃石・繊維	灰黄褐/にぶい黄	破片資料 (胴部)	炉跡
4	4	深鉢	(9.7)/-/—	羽状ループ文。下に2条の沈線上に刺突列。内面は横位ミガキ。	縄文 LR・RL (0段多条)	良	角閃石・繊維	黒	破片資料 (胴部)	炉跡
5	4	深鉢	(6.3)/-/—	内外面とも粗いヘラナデ調整。外面にヘラ状工具痕か。		良	長石・石英・繊維	にぶい褐/黒褐	破片資料 (胴部)	下層

遺構外出土土器観察表

挿図No	図版No	器種	法量 (器高/口径/底径) (cm)	文様と調整	原体	焼成	混和材	色調 (外面/内面)	備	考
13-1	4	深鉢	(4.0)/-/—	梯子状沈線。口唇部に小突起貼付。内面は縦位ミガキ。		良	長石・繊維	にぶい黄橙	破片資料 (口縁部)	1～3は同一個体。関山I式
2	4	深鉢	(6.3)/-/—	梯子状沈線。瘤状突起貼付。コンパス文。内面は縦位ミガキ。		良	長石・繊維	褐灰/にぶい黄橙	破片資料 (頸部)	関山I式
3	4	深鉢	(4.8)/-/—	梯子状沈線。瘤状突起貼付。コンパス文。以下斜縄文。内面は縦位ミガキ。	縄文 RL	良	長石・繊維	にぶい黄橙	破片資料 (頸部)	関山I式
4	4	深鉢	(4.8)/-/—	口縁部文様帯。組紐文地に半載竹管文。内面は横位ナデ。		良	繊維	にぶい褐/明赤褐	破片資料 (頸部)	関山II式
5	4	深鉢	(5.5)/-/—			良	石英・繊維	暗褐/にぶい褐	破片資料 (口縁部)	

6	4	深鉢	(3.6)/-/—	波状口縁。			良好	繊維	黄褐/黄灰	破片資料(口縁部)	閉山II式
7	4	深鉢	(5.6)/-/—				良好	繊維	浅黄	破片資料(口縁部)	閉山II式
8	4	深鉢	(6.6)/-/—	斜縄文。内面は横位ナデ。			良好	長石・繊維	褐	破片資料(口縁部)	閉山II式
9	4	深鉢	(5.8)/-/—	羽状縄文。内面は横位ナデ。			良好	長石・繊維	褐	破片資料(口縁部)	閉山II式
10	4	深鉢	(5.3)/-/—				良好	角閃石・長石・繊維	橙/にぶい黄橙	破片資料(胴部)	閉山II式
11	4	深鉢	(4.3)/-/—	縦位羽状縄文。内面は横位ナデ。			良好	長石・繊維	橙/灰黄褐	破片資料(胴部)	閉山II式
12	4	深鉢	(4.7)/-/—	縦位羽状縄文。内面は横位ナデ。			良好	石英・繊維	明赤褐/褐灰	破片資料(胴部)	閉山II式
13	4	深鉢	(4.4)/-/—	斜縄文。内面はナデ。		縄文RL (0段多条)	良好	長石・繊維	橙/にぶい黄橙	破片資料(胴部)	閉山II式
14	4	深鉢	(3.4)/-/—	羽状縄文。内面は横位ナデ。		縄文LR・RL	良好	角閃石・繊維	黒褐/にぶい褐	破片資料(胴部)	閉山II式
15	4	深鉢	(3.5)/-/—	羽状縄文。内面はナデ。		縄文LR・RL	良好	角閃石・繊維	橙/にぶい黄橙	破片資料(胴部)	閉山II式
16	4	深鉢	(3.2)/-/—	羽状縄文。内面は横位ナデ。		縄文LR・RL (0段多条)	良好	角閃石・繊維	にぶい褐/にぶい橙	破片資料(胴部)	閉山II式
17	4	深鉢	(4.5)/-/—	斜縄文。内面は縦位ナデ。		縄文LR (0段多条)	良好	繊維	にぶい黄褐/褐灰	破片資料(胴部)	閉山II式
18	4	深鉢	(4.2)/-/—	斜縄文。内面は横位ナデ。		縄文RL	良好	長石・繊維	にぶい黄橙/浅黄	破片資料(胴部)	閉山II式
19	4	深鉢	(5.8)/-/—				良好	角閃石・繊維	橙/灰黄褐	破片資料(胴部)	閉山II式
20	4	深鉢	(6.8)/-/—	羽状縄文。内面は縦位ミガキ。		縄文LR・RL	良好	繊維	にぶい黄橙/灰黄褐	破片資料(胴部)	閉山II式
21	4	深鉢	(8.2)/-/—	櫛描波状文。以下斜縄文。内面は横位ナデ。		縄文RL	良好	角閃石・繊維	明黄褐/灰黄褐	破片資料(胴部)	閉山II式
22	4	深鉢	(3.6)/-/—	異節斜縄文。3本単位櫛描波状文。内面は横位ナデ。			良好	角閃石・繊維	灰褐/にぶい黄橙	破片資料(胴部)	閉山II式
23	4	深鉢	(5.7)/-/—	異節斜縄文。4本単位櫛描波状文。内面は横位ナデ。			良好	角閃石・長石・繊維	にぶい黄褐	破片資料(胴部)	閉山II式
24	4	深鉢	(7.4)/-/—	異節斜縄文。4本単位櫛描波状文。内面は横位ナデ。			良好	繊維	にぶい褐	破片資料(胴部)	閉山II式
25	4	深鉢	(3.3)/-/—	波状口縁。組紐文。内面は横位ナデ。			良好	長石・繊維	橙	破片資料(口縁部)	閉山II式
26	4	深鉢	(4.6)/-/—	組紐文。内面は横位ナデ。			良好	長石・繊維	明赤褐/にぶい橙	破片資料(胴部)	閉山II式
27	4	深鉢	(4.0)/-/—	組紐文。内面は横位ナデ。			良好	繊維	灰黄/浅黄	破片資料(胴部)	閉山II式
28	4	深鉢	(4.7)/-/—	組紐文。内面は横位ナデ。			良好	繊維	にぶい褐/灰褐	破片資料(胴部)	閉山II式
29	4	深鉢	(8.6)/-/—	コンパス文。内面は横位ナデ。			やや良	繊維	橙/にぶい黄橙	破片資料(胴部)	閉山II式
30	4	深鉢	(4.7)/-/—	多条ループ文。内面は横位ナデ。			良好	繊維	にぶい黄褐	破片資料(胴部)	閉山II式
31	4	深鉢	(6.1)/-/—	複節(0段多条)。内面は横位ナデ。		複節(0段多条)	良好	角閃石・長石・繊維	明褐/にぶい黄橙	破片資料(底部)	閉山II式
32	4	深鉢	(3.3)/-/—	前々段反捻り。は横位ナデ。		前々段反捻り	良好	長石・繊維	にぶい黄橙/黒褐	破片資料(胴部)	閉山II式
33	4	深鉢	(4.3)/-/—	直前段反捻り。内面は横位ナデ。		直前段反捻り	良好	長石・繊維	にぶい褐/明褐	破片資料(胴部)	閉山II式
34	4	深鉢	(9.2)/-/—	異なる原体の結節。内面は横位ナデ。		結節縄文	良好	長石・繊維	にぶい橙/にぶい黄橙	破片資料(胴部)	閉山II式
35	4	深鉢	(3.8)/-/—	束の縄文でハの字を呈する。内面は縦位ナデ。		束の縄文	良好	長石	にぶい橙/にぶい黄橙	破片資料(胴部)	閉山II式
36	4	深鉢	(1.4)/-/— <9.4>	縦位羽状縄文。横位ナデ。		縄文LR・RL (0段多条)	良好	角閃石・長石・繊維	にぶい黄橙	底部45%残存。	神/木式

出土石器観察表（剝片を除く）

石器No.	挿図No.	図版No.	遺構区分	注記番号	区分	器種	形態	石材	遺存率	長さ	折れ1	幅	折れ2	厚さ	折れ3	重さ	備考
1	8-7	3	SI01	13	剝片石器類	石鏃	凹基	珪質凝灰岩	完形	1.8cm		1.4cm		0.5cm		0.8g	
2	8-8	3	SI01		剝片石器類	削器	横形	黒色頁岩	完形	3.9cm		4.4cm		1.1cm		15.0g	
3	8-9	3	SI01		剝片石器類	削器	縦形	黒色頁岩	完形	5.0cm		3.9cm		1.2cm		16.0g	
4	8-10	3	SI01		礫石器	敲石	平形	粗粒輝石安山岩	完形	10.8cm		7.3cm		3.6cm		444.0g	
5	11-6	4	SI02		剝片石器類	石鏃	凹基	珪質凝灰岩	完形	1.8cm		1.3cm		0.4cm		0.5g	
6	11-7	4	SI02	5	礫石器	凹石	円形	細粒輝石安山岩	完形	9.5cm		8.2cm		4.7cm		462.0g	
7	12-1	4	SK02	1	礫石器	磨石	円形	粗粒輝石安山岩	完形	8.8cm		6.7cm		4.2cm		343.0g	
8	12-2	4	SK02	2	その他	球状耳飾	小形	葉礫石	1/2	2.5cm		<2.5>cm		0.5cm		2.0g	孔径0.8~1.0cm
9	14-37	6	遺構外		剝片石器類	削器	縦形	黒色頁岩	完形	5.2cm		1.8cm		1.1cm		7.0g	
10	14-38	6	遺構外		剝片石器類	削器	横形	黒色頁岩	完形	3.9cm		5.1cm		0.8cm		17.0g	
11	14-39	6	遺構外		その他	磨製石斧	定角式	凝灰質砂岩	完形	10.1cm		3.8cm		2.5cm		148.0g	側縁再生。
12	14-40	6	遺構外		礫石器	敲石	長形	粗粒輝石安山岩	折れ	6.1cm	+	3.0cm		2.1cm		57.0g	
13	14-41	6	遺構外		礫石器	凹石	長形	粗粒輝石安山岩	完形	11.4cm		5.2cm		3.6cm		304.0g	
14	14-42	6	遺構外		礫石器	凹石	長形	粗粒輝石安山岩	完形	13.1cm		5.9cm		3.5cm		316.0g	
15	14-43	6	遺構外		礫石器	線状痕のある石器	平円形	粗粒輝石安山岩	完形	12.8cm		10.2cm		3.8cm		548.0g	

写 真 图 版



遺跡全景



遺跡近景① (南より)



埋没谷 (北東より)



遺跡近景② (北より)



畝状遺構 (北東より)



SI01 (南より)



SI02 炉 (南西より)



SI01 遺物出土状況



SK01 (南東より)



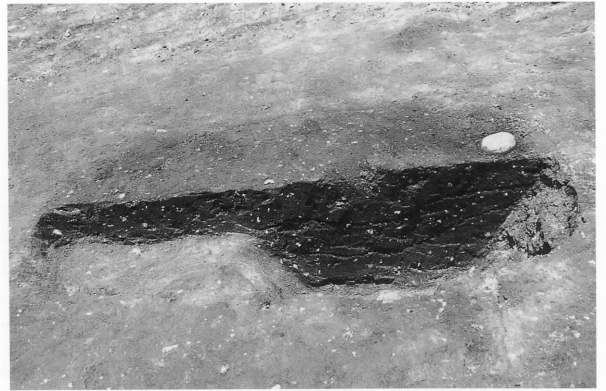
SI02 (南西より)



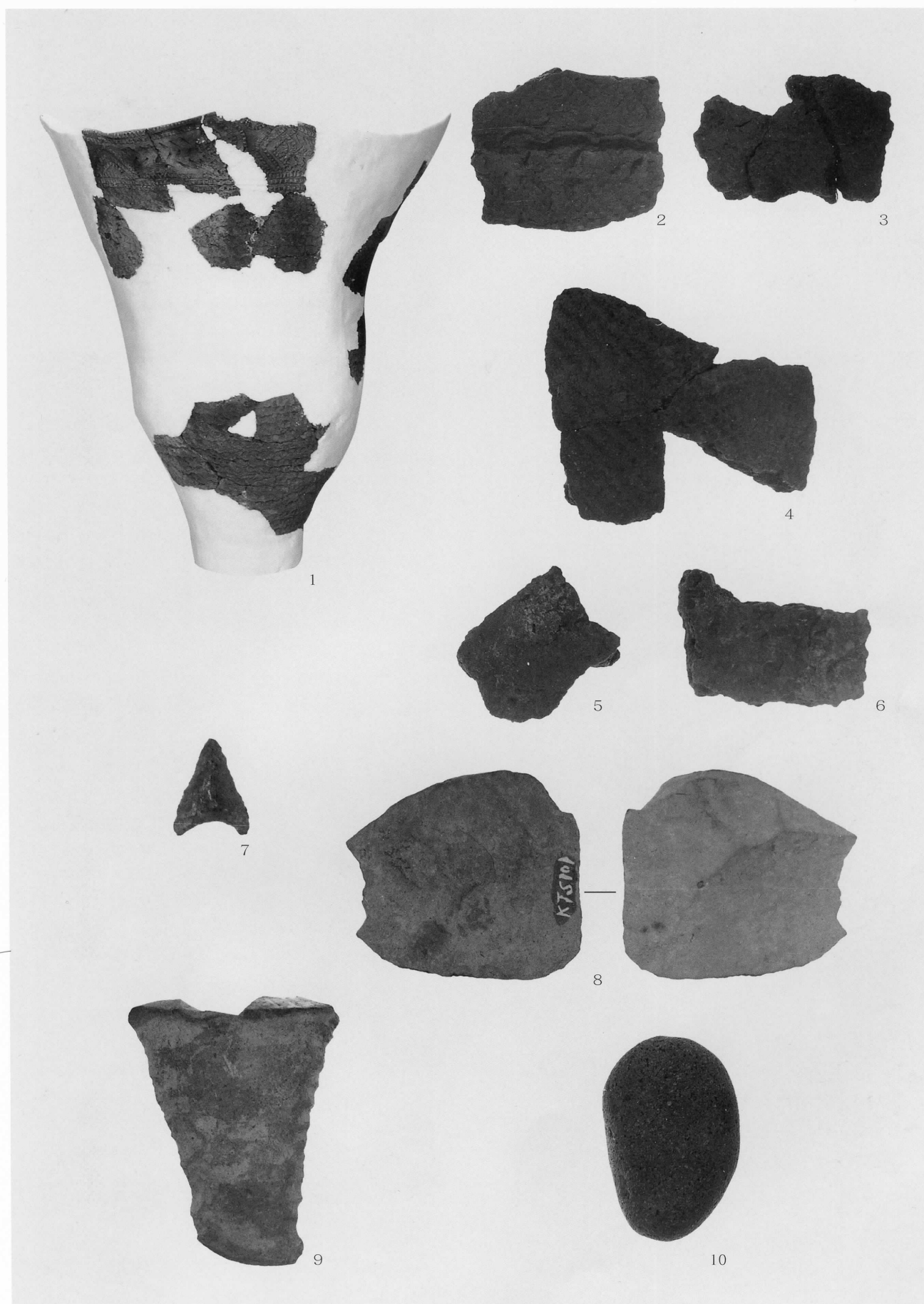
SK02 (南東より)



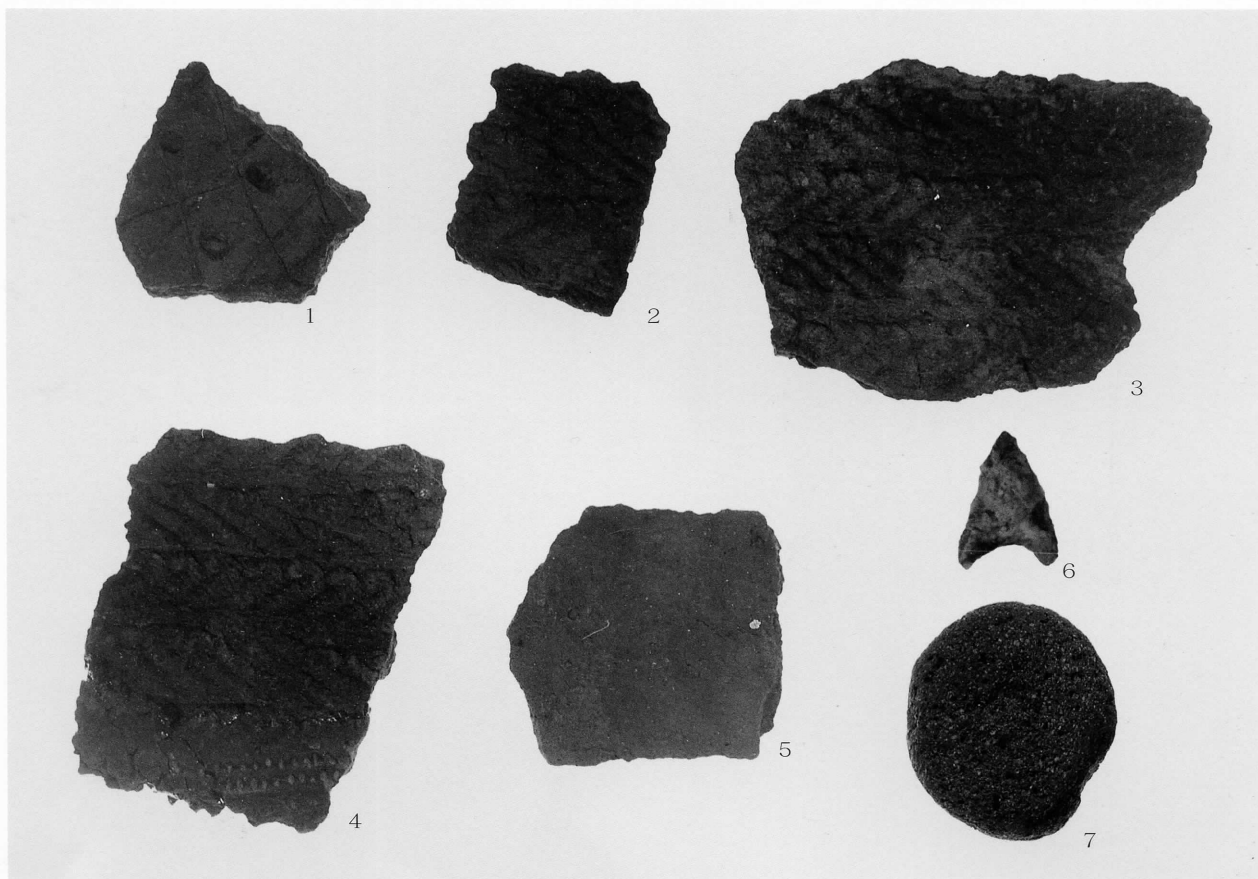
SI02 遺物検出状況 (南西より)



SK02 半截状況 (南東より)



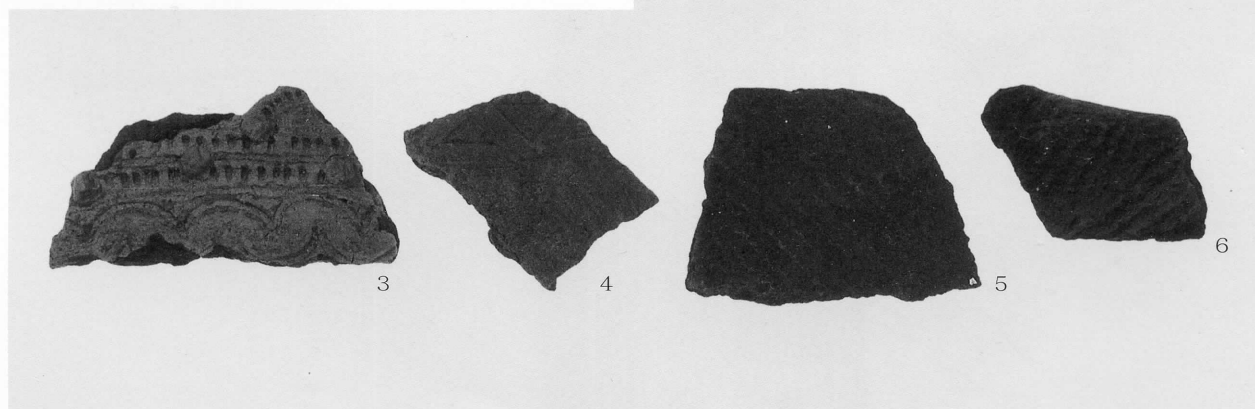
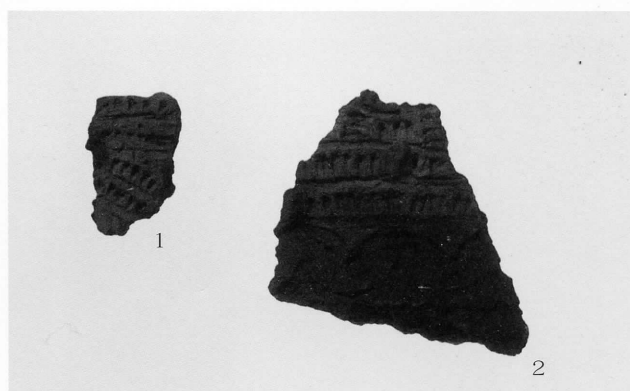
SI01 出土遺物



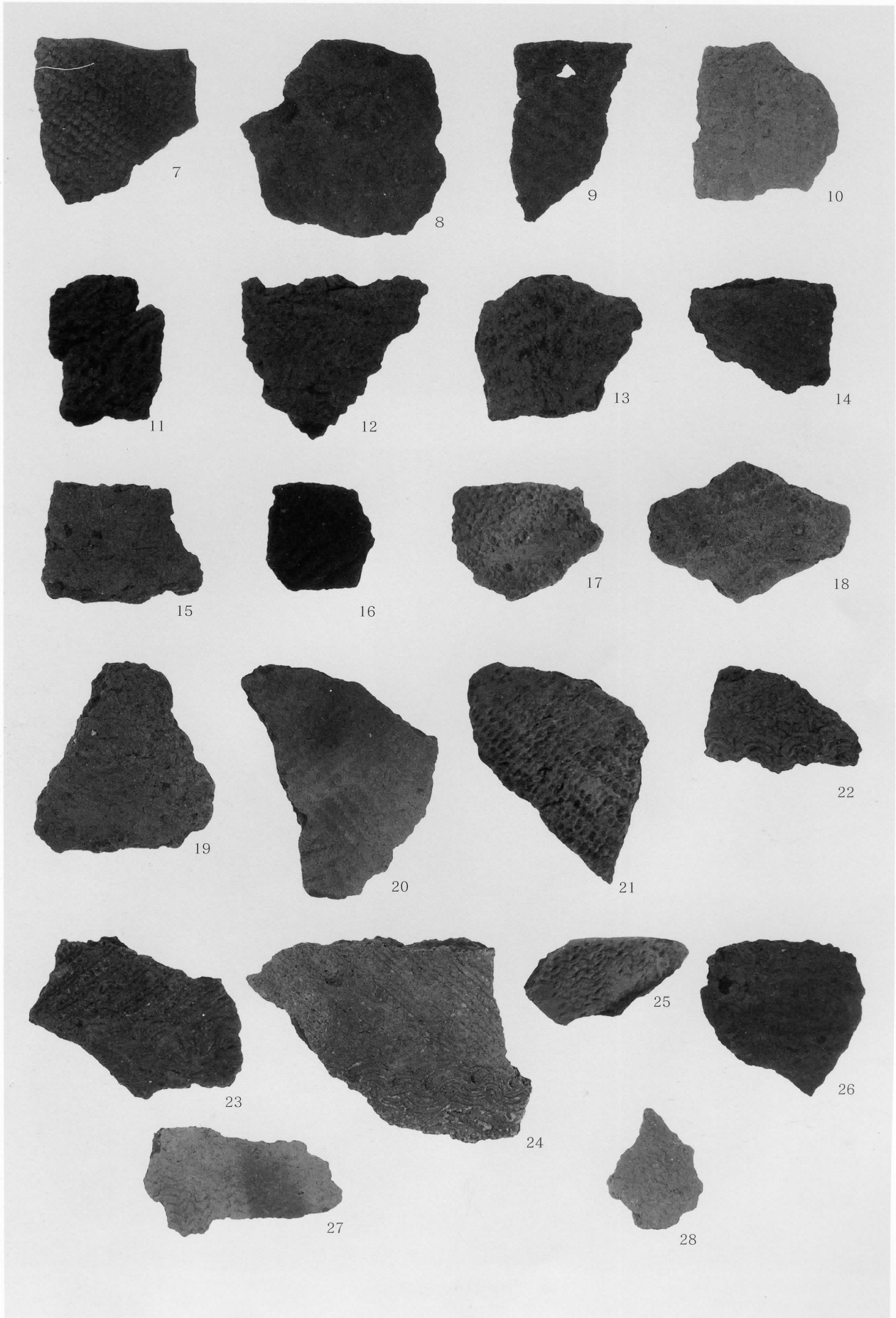
SI02 出土遺物



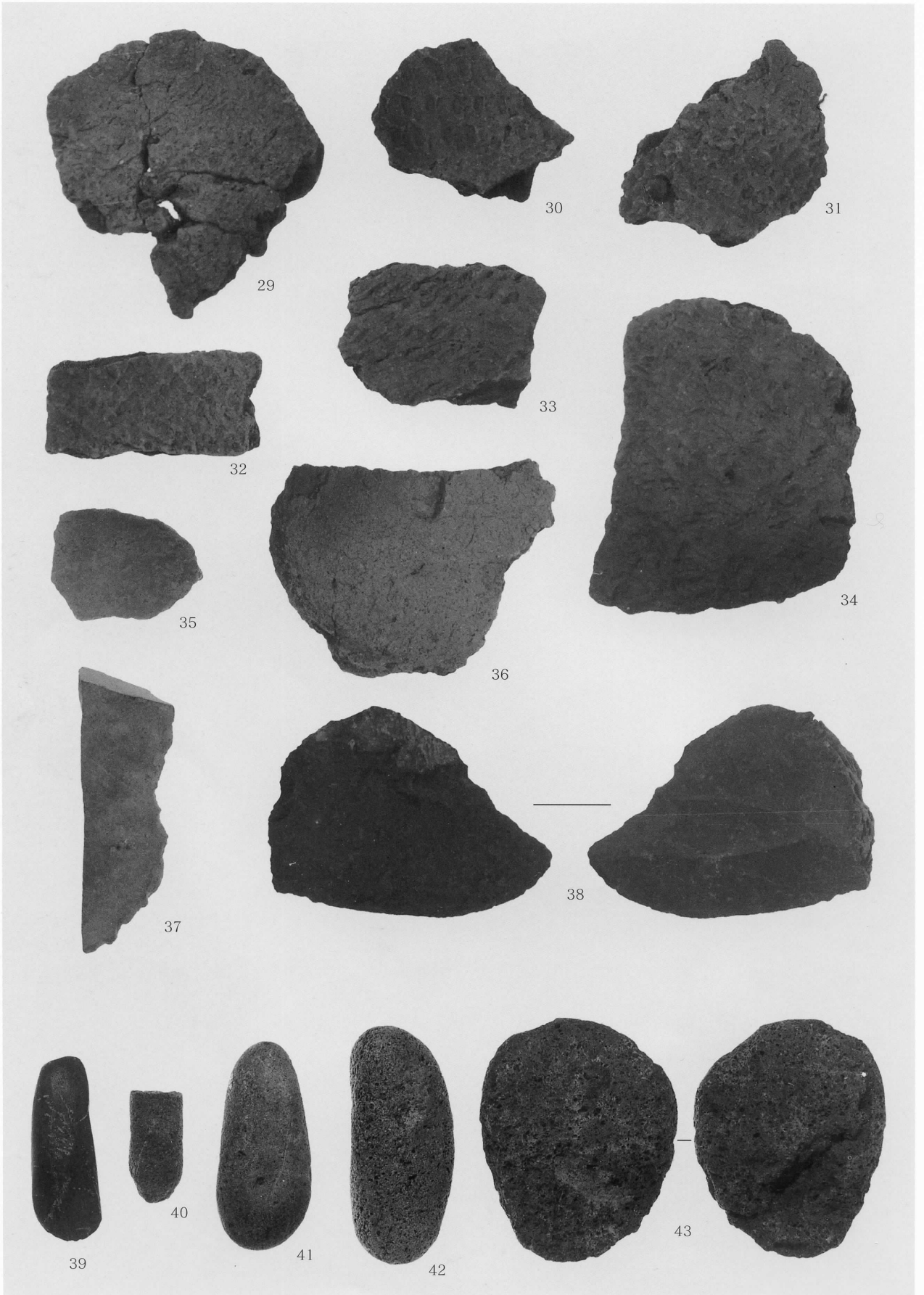
SK02 出土遺物



遺構外出土遺物①



遺構外出土遺物②



遺構外出土遺物③

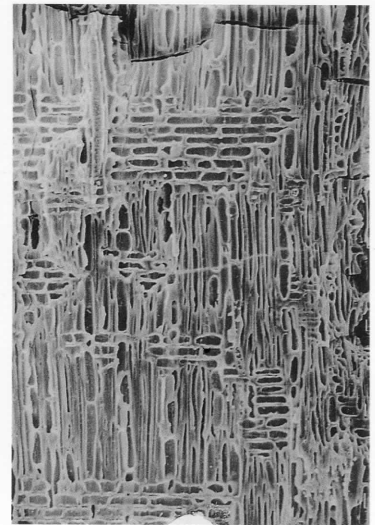
——暮坪遺跡出土炭化材の樹種①——



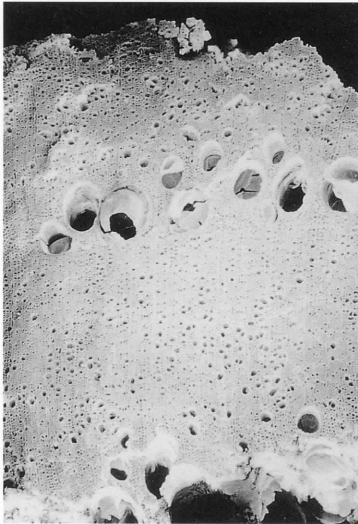
1a コナラ属コナラ節 (横断面)
SK02 bar:0.5mm



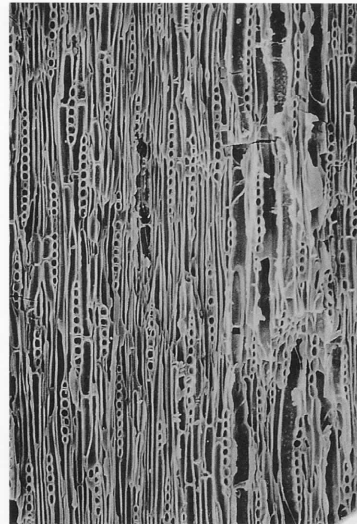
1b コナラ属コナラ節 (接線断面)
SK02 bar:0.1mm



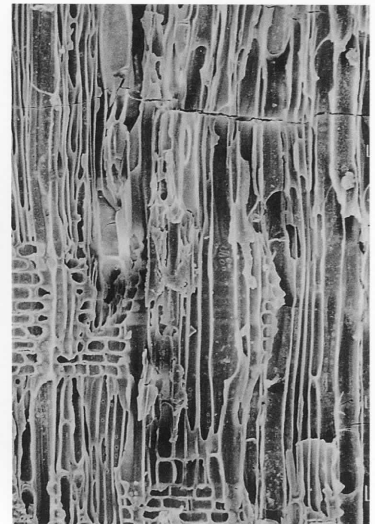
1c コナラ属コナラ節 (放射断面)
SK02 ber:0.1mm



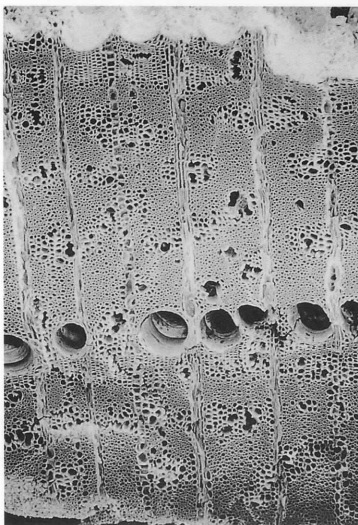
2a クリ (横断面)
SK02 ber:0.5mm



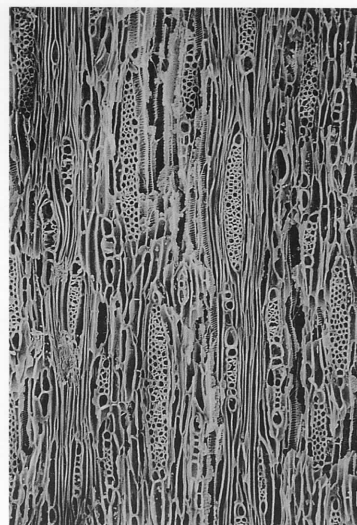
2b クリ (接線断面)
SK02 ber:0.5mm



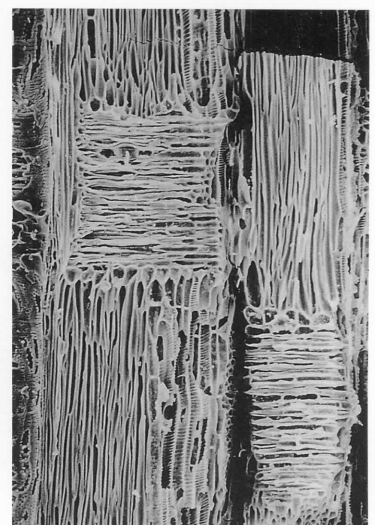
2c クリ (放射断面)
SK02 ber:0.1mm



3a ケヤキ (横断面)
SI01 ber:0.5mm



3b ケヤキ (接線断面)
SI01 ber:0.5mm



3c ケヤキ (放射断面)
SI01 ber:0.1mm

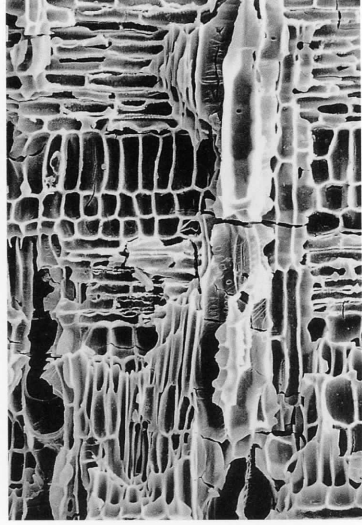
—— 暮坪遺跡出土炭化材の樹種② ——



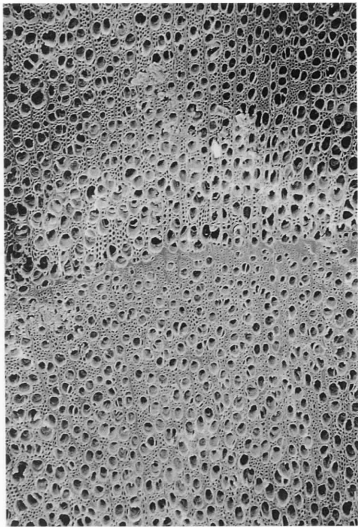
4a ヤマグワ (横断面)
SK02 ber:0.5mm



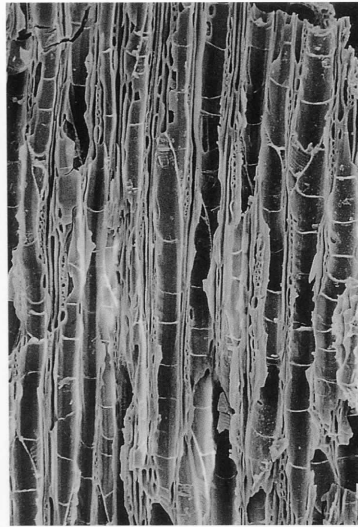
4b ヤマグワ (接線断面)
SK02 ber:0.5mm



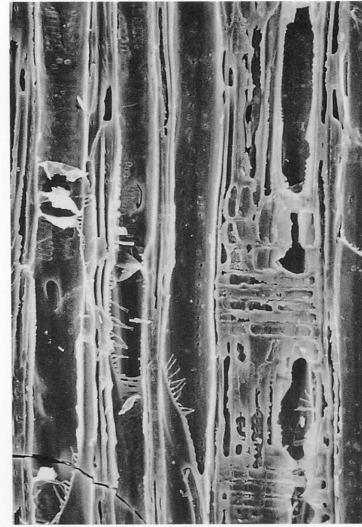
4c ヤマグワ (放射断面)
SK02 ber:0.1mm



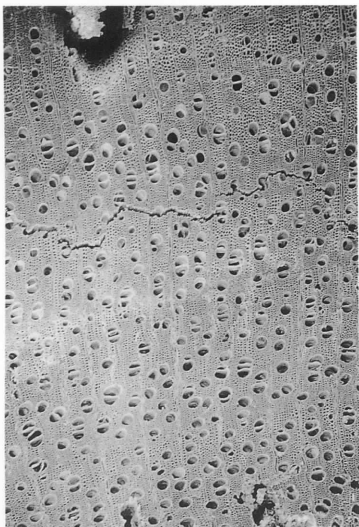
5a アジサイ属 (横断面)
SK02 ber:0.5mm



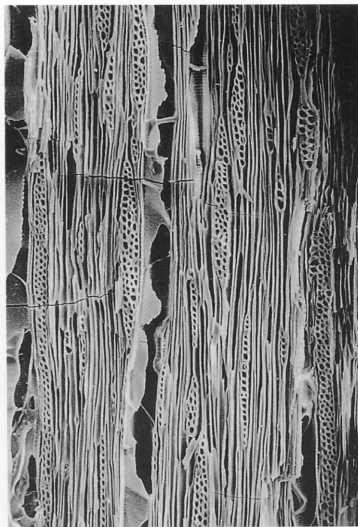
5b アジサイ属 (接線断面)
SK02 ber:0.1mm



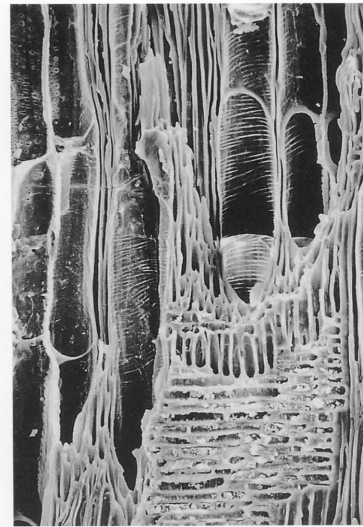
5c アジサイ属 (放射断面)
SK02 ber:0.1mm



6a カエデ属 (横断面)
SK02 ber:0.5mm

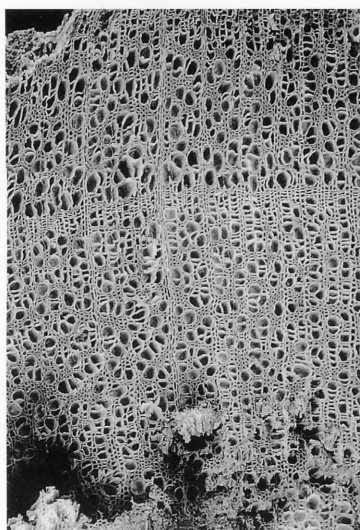


6b カエデ属 (接線断面)
SK02 ber:0.1mm

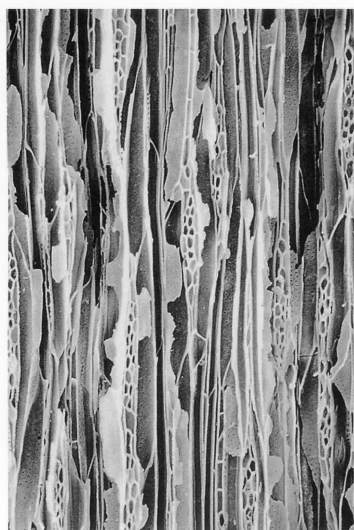


6c カエデ属 (放射断面)
SK02 ber:0.1mm

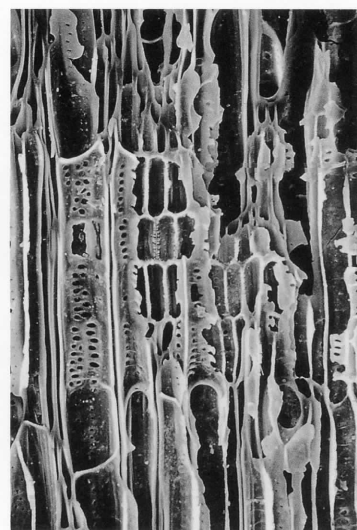
—— 暮坪遺跡出土炭化材の樹種③ ——



7a ニワトコ (横断面)
SK02 ber:0.5mm



7b ニワトコ (接線断面)
SK02 ber:0.1mm



7c ニワトコ (放射断面)
SK02 ber:0.1mm



出土した炭化種実 (スケールは1cm)
1、2 : クリ、炭化子葉、②暮坪遺跡SI01炭化種子

報告書抄録

ふりがな	くれつぼいせき							
書名	暮坪遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	長野原町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	富田孝彦							
編集機関	長野原町教育委員会							
所在地	〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋174 TEL 0279-82-4517							
発行年月日	西暦2001年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
くれつぼいせき 暮坪遺跡	ナガノハラマチオオアザ 長野原町大字 ハネオアザタレットボ 羽根尾字暮坪	10424	117	38°33'06" ~08"	138°36'33" ~35"	000515 ~000608	1,715	西吾妻福祉 病院建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
暮坪	集落跡 墓跡	縄文時代 前期前葉 時期不明	竪穴式住居跡 土壇墓 土坑 畝状遺構 埋没谷	2軒 1基 1基 1基 1条	縄文土器 縄文石器（礫石器・剥 片石器類・玦状耳飾）		縄文時代前期前葉二ツ 木式期の集落跡	

暮坪遺跡

— (仮称) 西吾妻福祉病院工事に伴う発掘調査報告書 —

平成13年3月28日 印刷

平成13年3月28日 発行

発行 群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋174

TEL 0279 (82) 4517 FAX 0279 (82) 4519

印刷 朝日印刷工業株式会社

